

¥1500 報 風俗奇譚

目で見る風俗絵巻

妖嬈女体緊縛写真と凄艶責め絵特集

第8集

1月号



風俗奇譚

第8集・1月号

目で見る風俗絵巻

昭和36年1月15日発行 昭和35年11月17日第3種郵便物認可
第8号（毎月1回15日発行） 昭和35年8月30日国鉄東局特別換承認証883号

定価180円

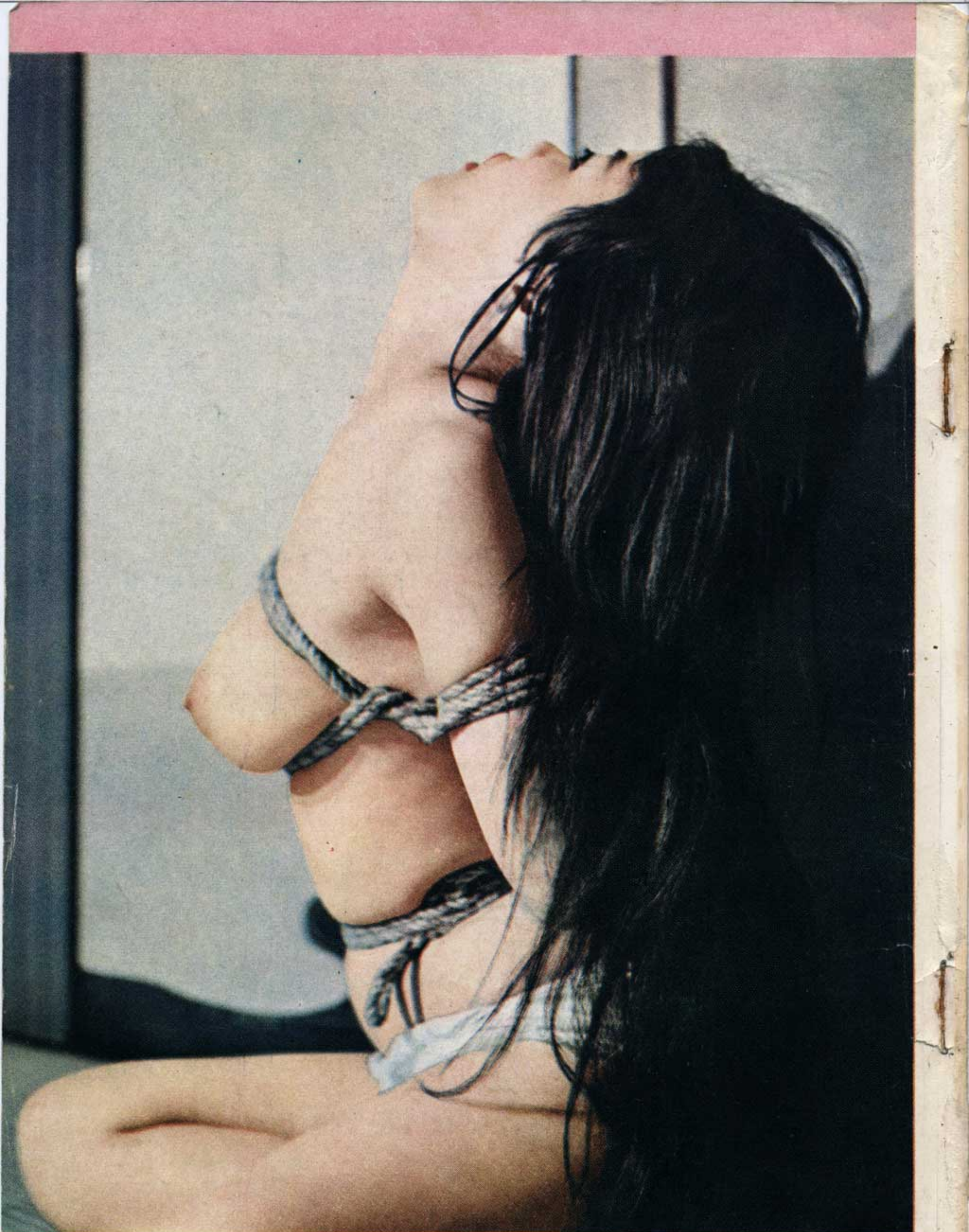


のぞかれていた J・B・ウエ筆
 (毛皮でひとり楽しむ女性を盗み見る男)

画報風俗奇譚 ⑧ 1月号
 昭和36年1月5日印刷
 昭和36年1月15日発行
 発行人 高倉一
 印刷所 刊行会印刷部
 東京都千代田区神田神保町1の35
 発行所 文献資料刊行会
 振替東京42494
 電話(291) 2430番



湯あみする女とのぞく男 (1881年) ジュール・ハンリオット筆



女体羞姿

縄を受けた女体が はじらいを含んだ表情で身もだえる〈モデル・舟木喜代子〉



縄は白い肌にまといつき 女のからだから 奇妙なリズムを ひきだす〈モデル・村上ユキ 西牧えり子〉



縛虐二重奏

クサリと首輪と縄

首力セ足力セ 手首は縄で そのうえからだにはクサ
リが巻きつき ああ悦虐の時へモデル・高月まゆみ





月 夜 (ジュール・ハンリオット筆の窃視者を描いたもの)

画報風俗奇譚 第8集・1月号 目次

(表紙) モルヒネ……………ステファン

色彩写真	女体	羞姿	女体責め絵集
縛虐二重奏……………(三)	クサリと首輪と繩……………(四)	クサリ吊り・腹を踏む・襲うへび……………(四三)	ドブを散歩・物干し場の責め……………(四四)
		吊り下げ女・針の床……………(四八)	

グラビア

盛装無残……………(二)	股しぱり……………(三八)
妖美のベッド……………(四)	縄にもだえる……………(四〇)
古風な花……………(二六)	鏡の前で……………(四二)
腹切り悶悦……………(二八)	縄の悶悦……………(五二)
縄とおんな……………(三〇)	椅子しぱり……………(五二)
クモしぱり……………(三二)	吊りの姿勢……………(五四)
乳しぱり……………(三四)	嗜虐ふたりブレイ……………(五六)
ぐるぐる巻き……………(二六)	手と足をぐるぐる縛り……………(五八)
デュエット・イン・ロープ……………(二八)	そり固めの拘束……………(六〇)
支那服の縛女……………(三〇)	事務所の虐待……………(六二)
妖花一輪……………(三二)	縛姿の男……………(六四)
テーブルの残虐……………(三四)	縛られた縛姿……………(六六)
恋縄の姿態……………(三六)	
(モデル) 村上ユキ……………高月まゆみ……………さつき・みち……………舟木喜代子	
井神せい子……………風早由美子……………西条さくら……………児玉幹也	



鞭打10のア・ラ・カルト

尻打ち・調教・きびしい教育・愛と苦痛・禁
男の家の私刑・子供のせつかん・女教師ほか
M・ラディゲ L・ミランド ルネ・ルロン(六八)
ルイス・バルト マルチン・メーレ ウイル
ヘルム・シュルツ ベズニエ 小説のさし絵

ピグマリオン4態……………フランツ・バイロス……………ハンリオット……………フォン・カプス……………(八〇)

自分を愛す……………ヘーゲマン……………(六六)
街頭の痴漢……………イギリスの諷刺画……………(七八)
女の臀部フェチズム……………オルランド……………(八四)

カプリス・イン・メキシコ……………榎 光 哉……………(二七)

女を縛る……………番場多計夫……………(八五)
める5景……………田上恵子……………(九六)
フォトス消される女……………三村次郎……………(九六)
(絵物語) 縄とムチに魅入られた女……………小田木啓介……………(九〇)
(絵物語) 女の責め絵巻……………田馬美久……………(一〇〇)

☆読者の広場……………(一〇六)
☆代理部だより……………(一一四)
☆編集室から……………(一二六)

女装マニア……………愛される3つ……………(一三六)

かびや・かずひこ

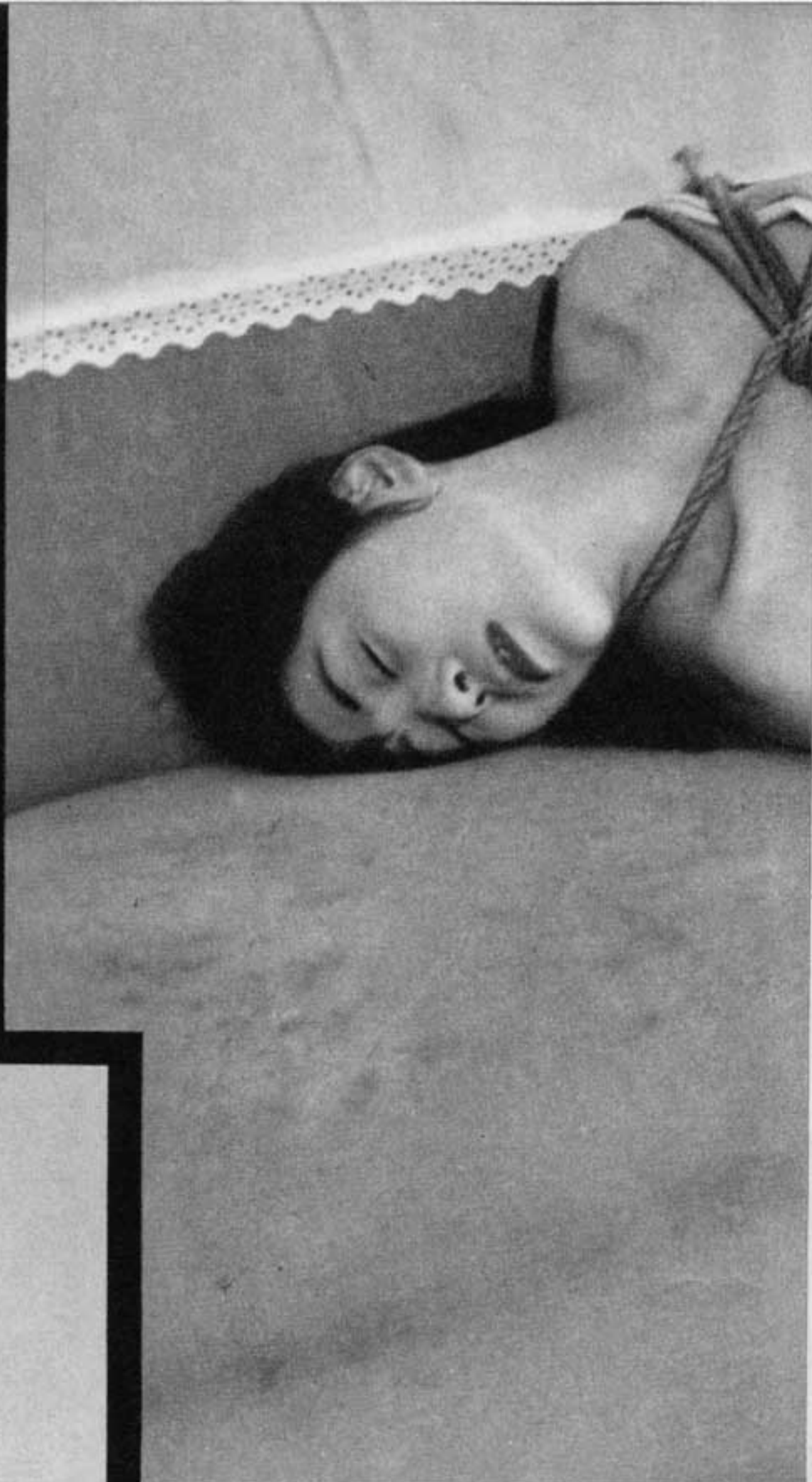


下男は納屋の情事をのぞく（1799年のフランスの銅版画）

盛装無残







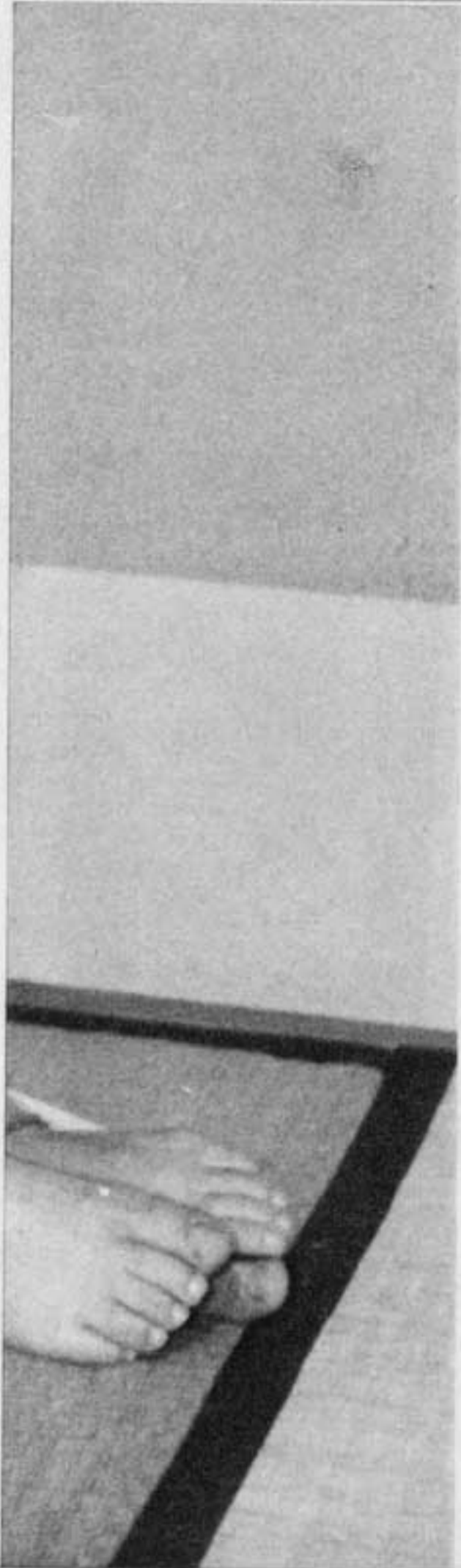
晴れ着の情事は 最高のなまめかしさをた
 だよわすという人がいる それなら 盛装
 した女の縛姿は 緊縛マニア垂涎のものと
 いう説も成り立つだろう たしかに ふり
 袖すがたもなまめかしいし それを縛る縄
 も どこか甘美な雰囲気をかもし出す い
 わば はなやかなムードの無残風景といっ
 たところだろうか これは 古風で しか
 も 新しい責めの姿へモデル・村上ユキ

妖美のベッド



和服の盛装で 洋室のベッドの上で縛ら
れた姿 このちぐはぐな責めの風景の
あやしい艶美さへモデル・高月まゆみへ

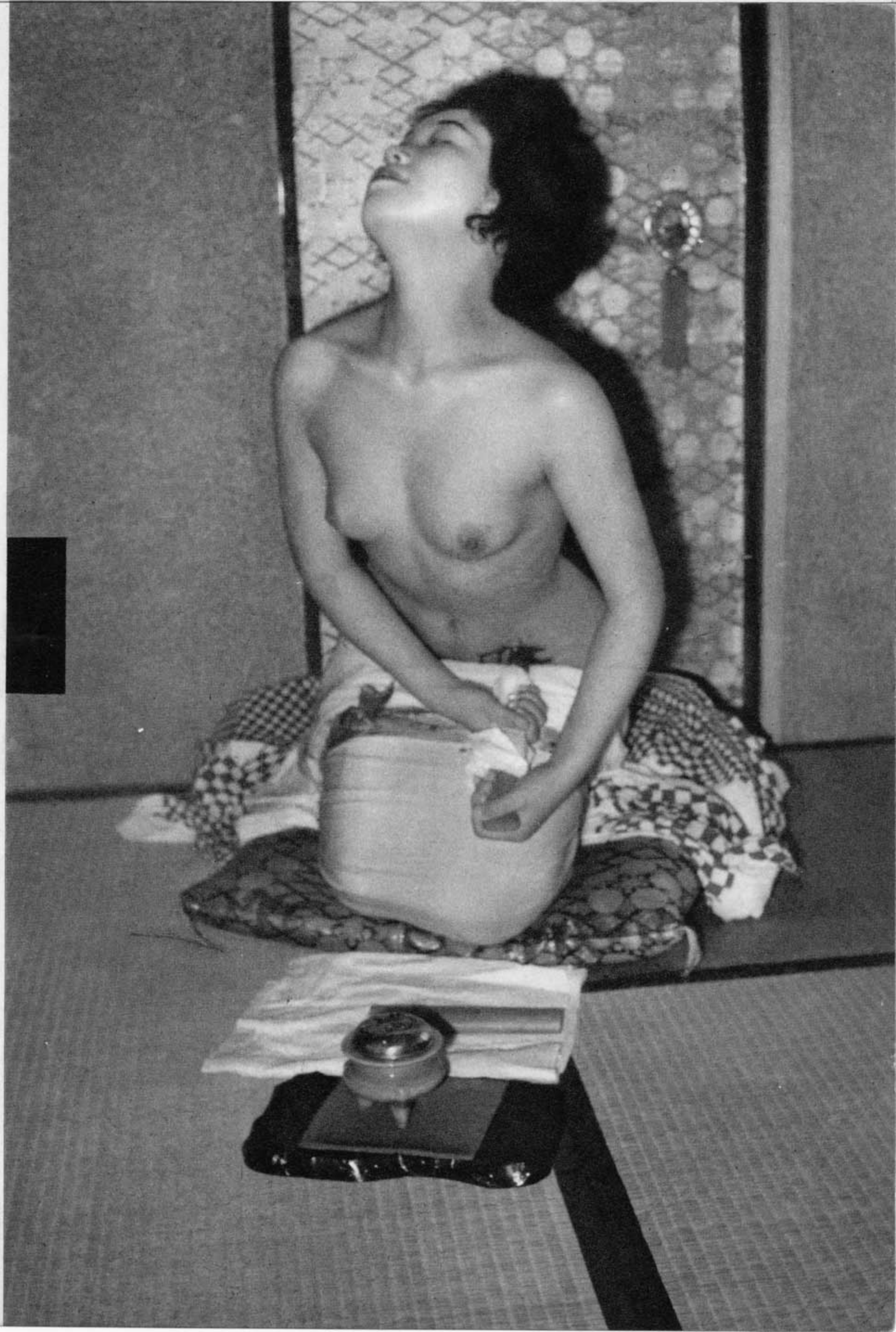




古風な花

いたいけな和服姿で しばられて責められるとき
奇妙な情感が 流れだす〈モデル・さつきみち〉



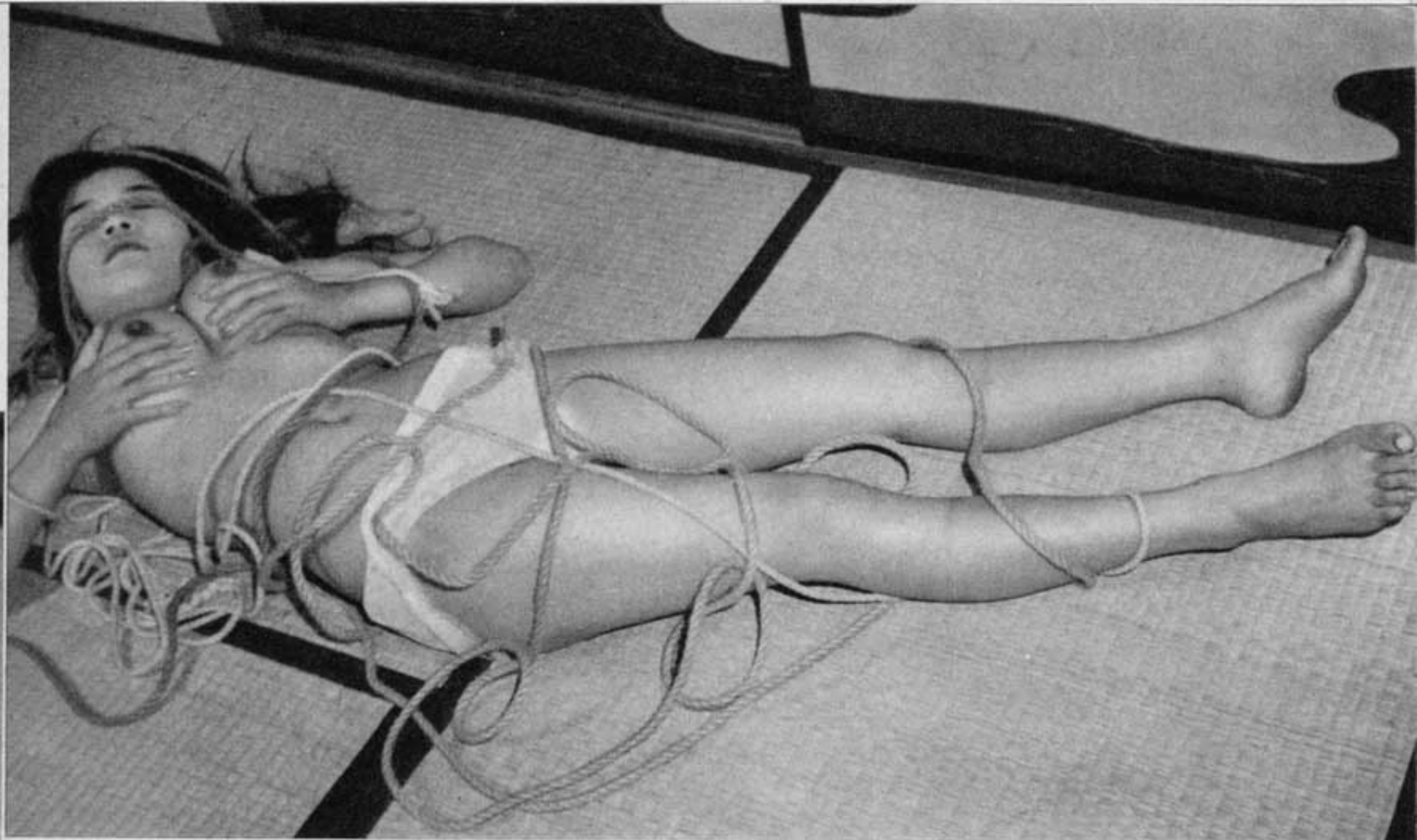




腹切り悶悦

凄愴 悲痛 これは わが国独特の切腹がも
つムード 哀愁がたちこめて でも痛々しい





縄とおんな

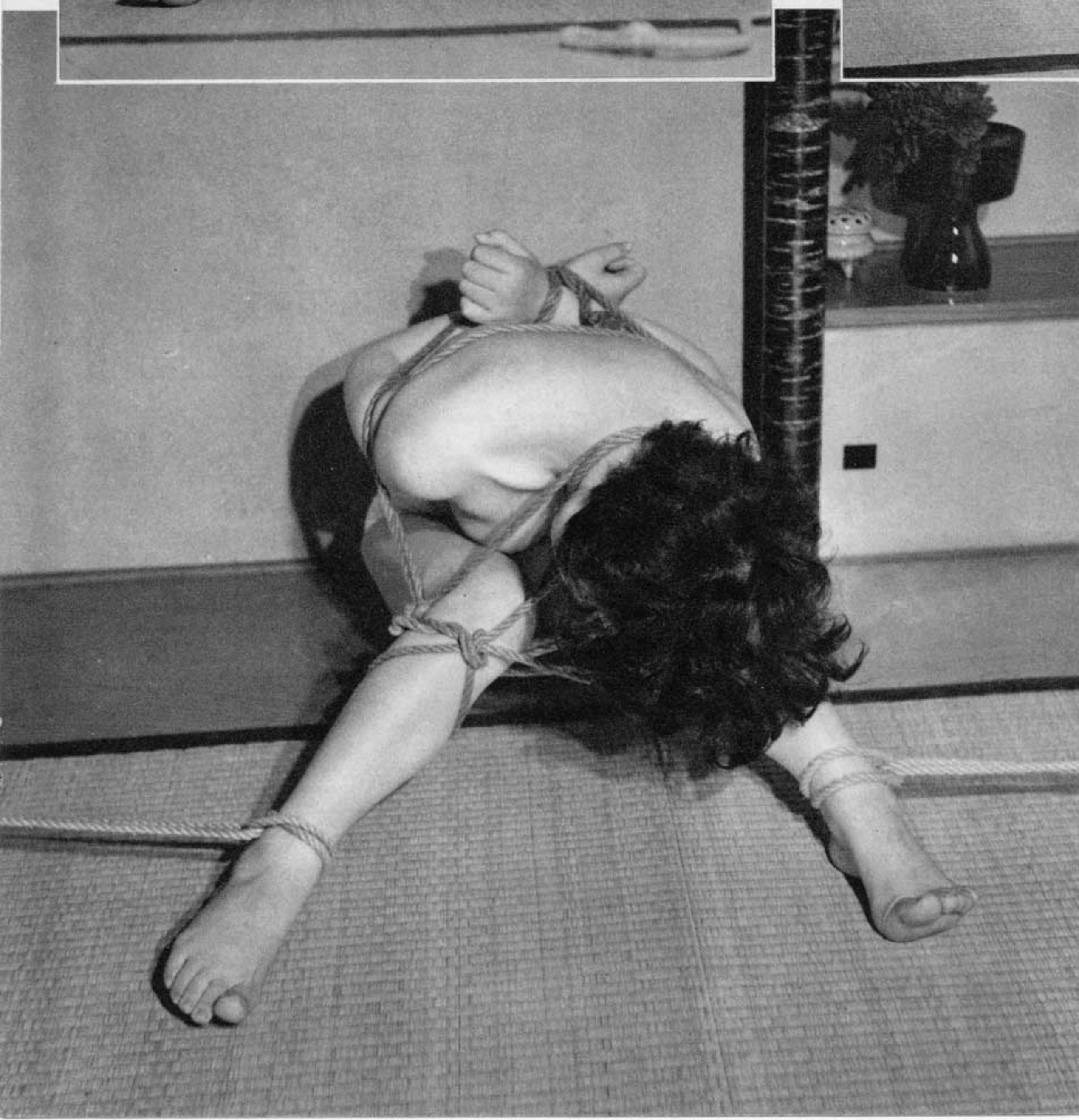
縄にまといつかれるのは 女の宿命 だから 縛らなくとも 白い肌
にまといつくだけでも 女は 陶醉できるのかくモデル・舟木喜代子>



クモしばり

身を伏せる姿勢を 平グモのようだという そんなポーズで縄をかけられ しかも 両足は 左右へグッとひっぱられ さて 身動きもできない このとらわれの形で 女は ただひたすらに 嗜虐の淵に 沈湎し 身内から湧きでてくる 静かな炎のような官能の波に うっとり 身をまかせる 〈モデル・井神せい子〉







乳
し
ば
り

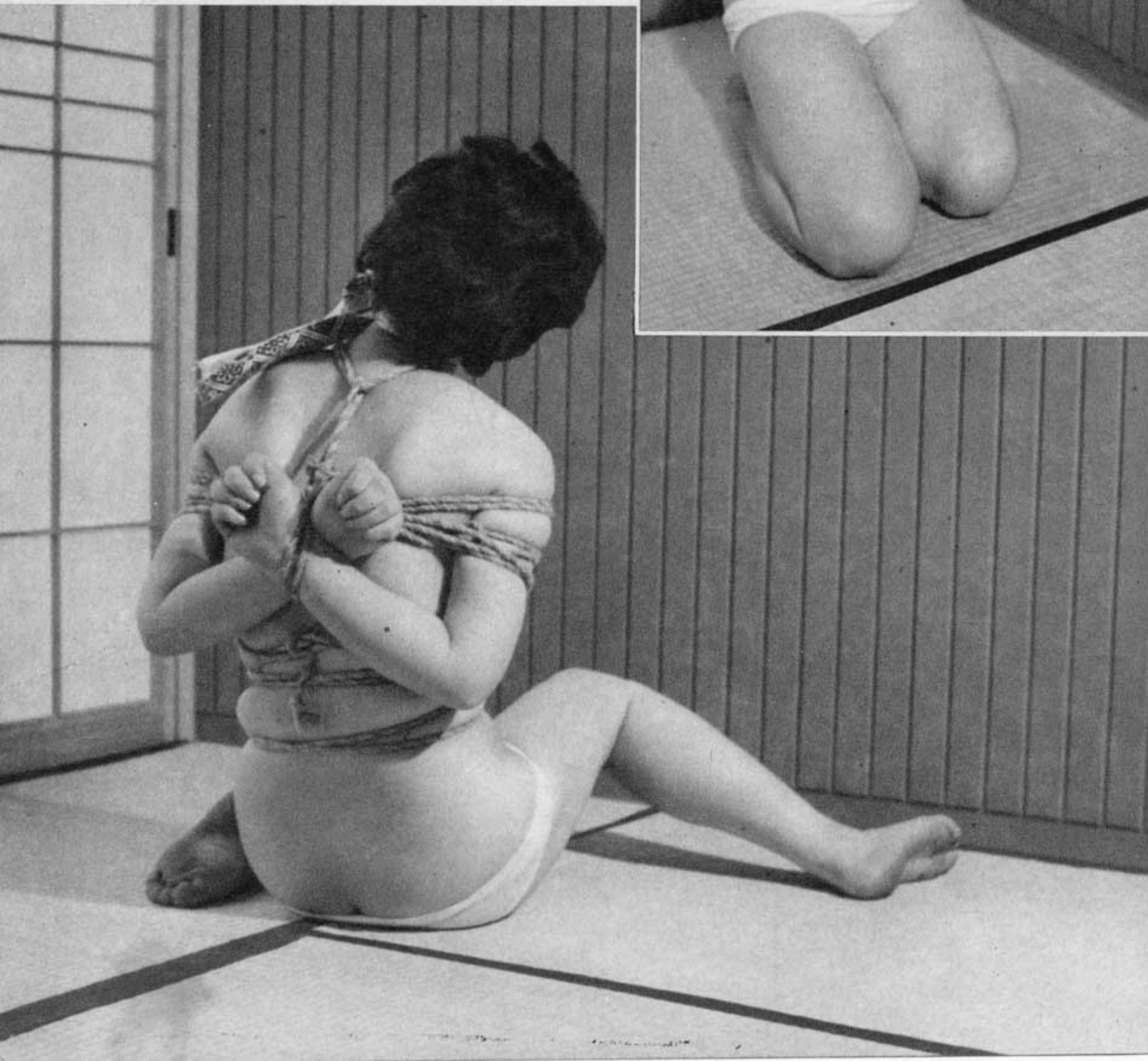


乳は 女の急所 そこをグツと縛られると
女は ああ と せつなげな声をあげる 白
い肌の下に眠っている女の感覚が 目をさま
すからだ それは 悪魔の息吹きであり 天
使の身もだえであり 宿命を背負った女のか
なしい業であり 悦虐の 遠い潮騒いなのだ

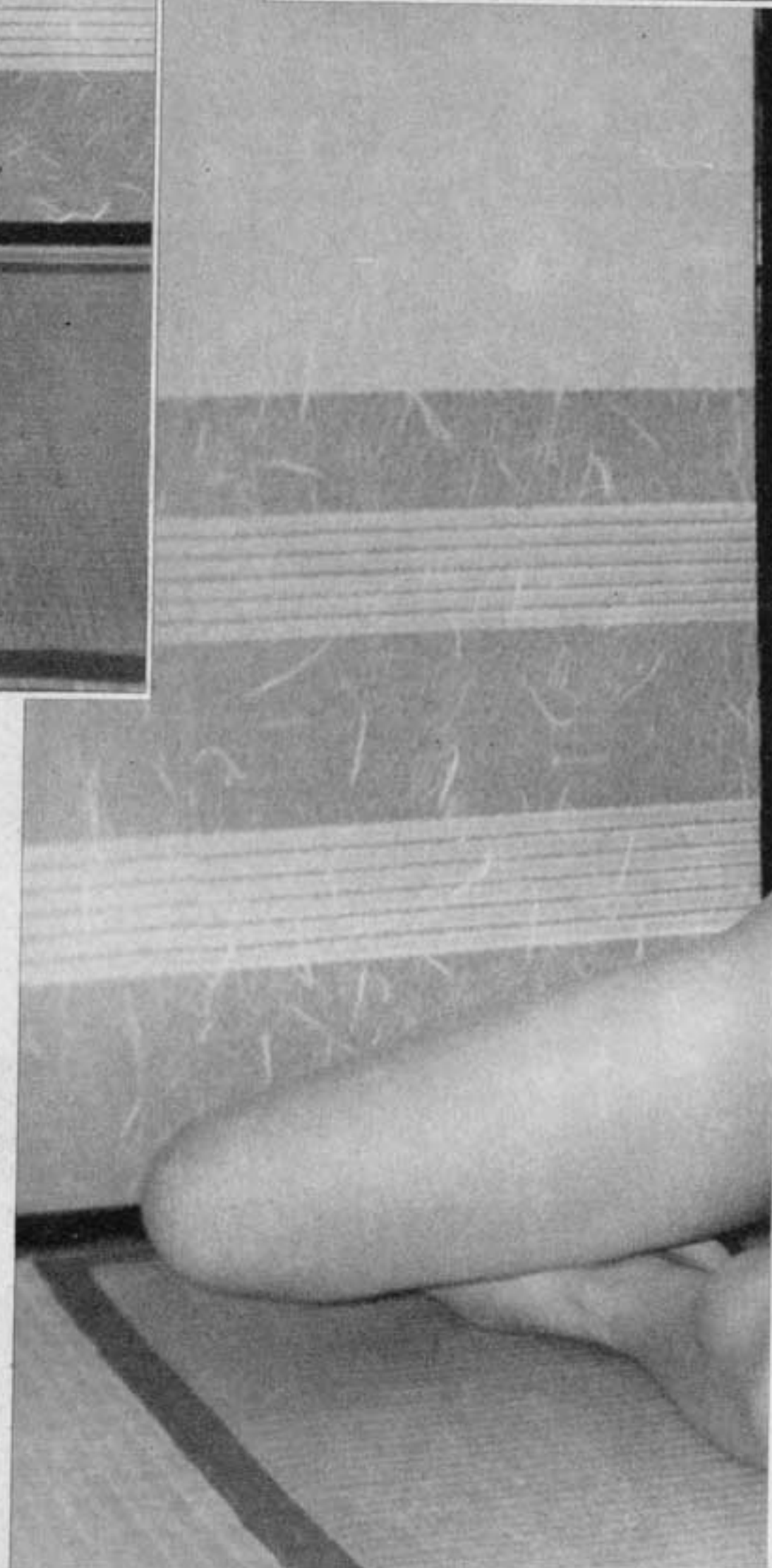
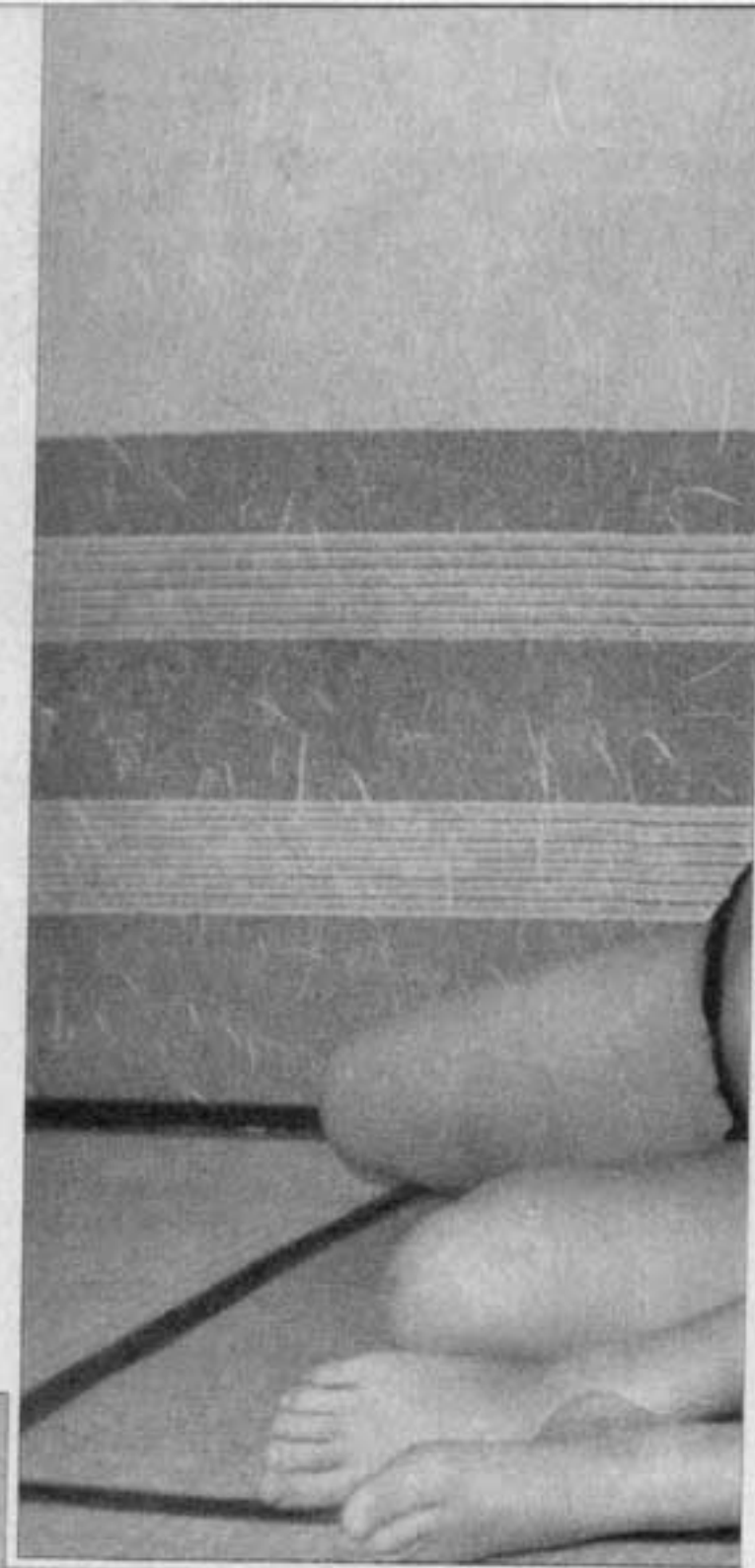
ぐるぐる巻き



繩はぐるぐる からだを巻いて
乳房をしめつけ 肌にくいこむ
おまけに 口にはサルゲツワ
この緊縛の姿のなかから
女は いったい なにを求める？
湧きでる奇妙な感覚と
燃えあがる官能のゆらめきと
身内を駆け回る甘美な陶酔と
さて そこに 女の法悦があり
なまなましい喜悅が生まれるというのか
とにかく女は 不思議な生きものだ

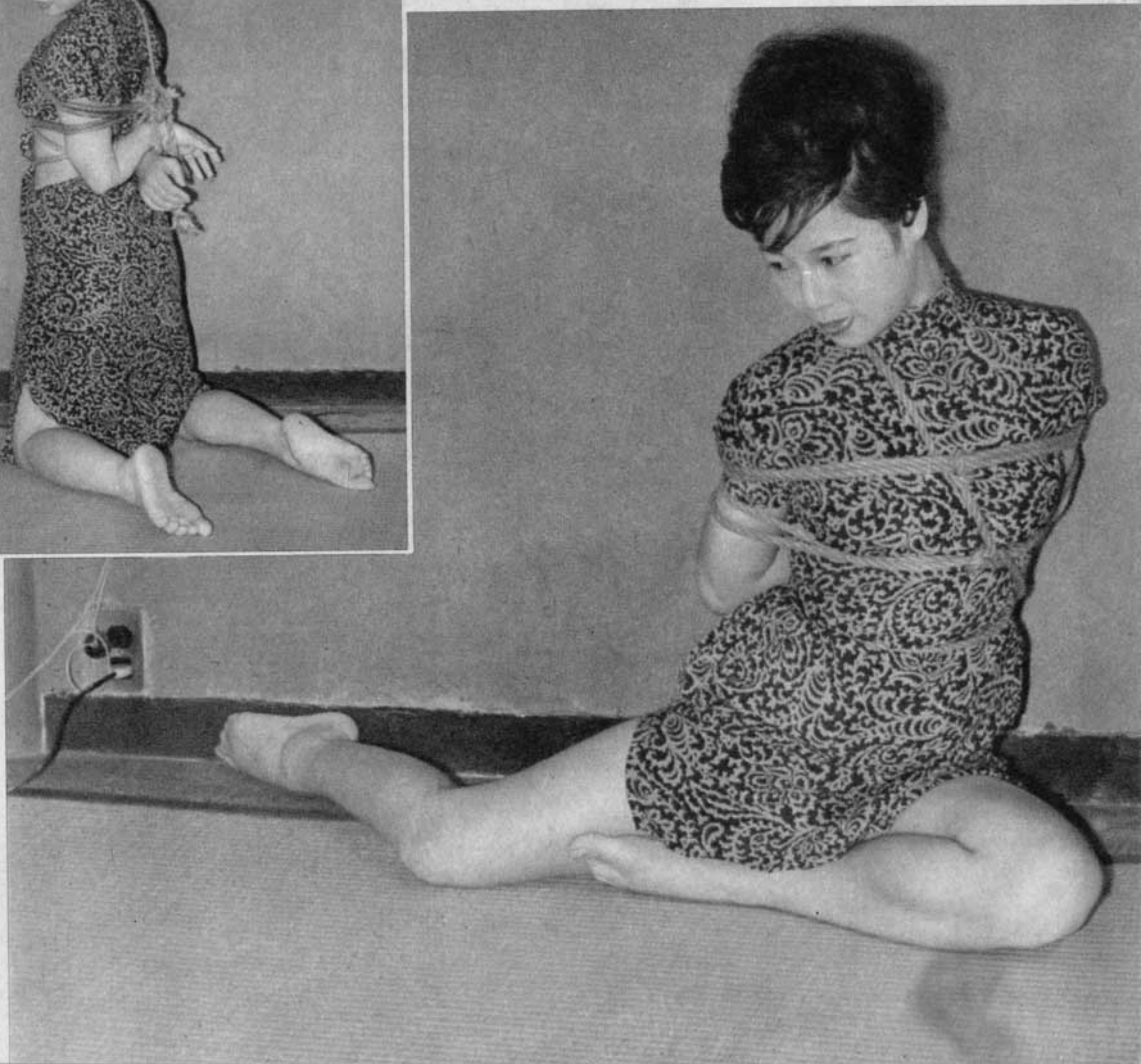






デュエット・ イン・ ロープ

おんなが ふたり しばらく
て しかも はだかで しば
られて かなでるうたは や
わはだの あつきちしおの
もえたぎる あまいめろでい
いはあもにい ゆめみるよ
うにながれくるはなのりずむ



支那服の縛女



支那服は からだの線を あらわ
に見せるだけでなく 無防備でも
ある すぐ 肌もむき出しになる



妖花一輪

石のつめたき 岩の痛さ 石と岩が肌
をかみ 縄がからだをしめあげる う
すくらがりに咲く これは 珍種の妖
花一輪 しべを乱して 咲きかおる
そのにおい そのつや そして まき
ちらす あやしい花粉のかおり それ
にあてられる男たちは 倒錯した性に
よい 迷い やがて 耽溺してしまう

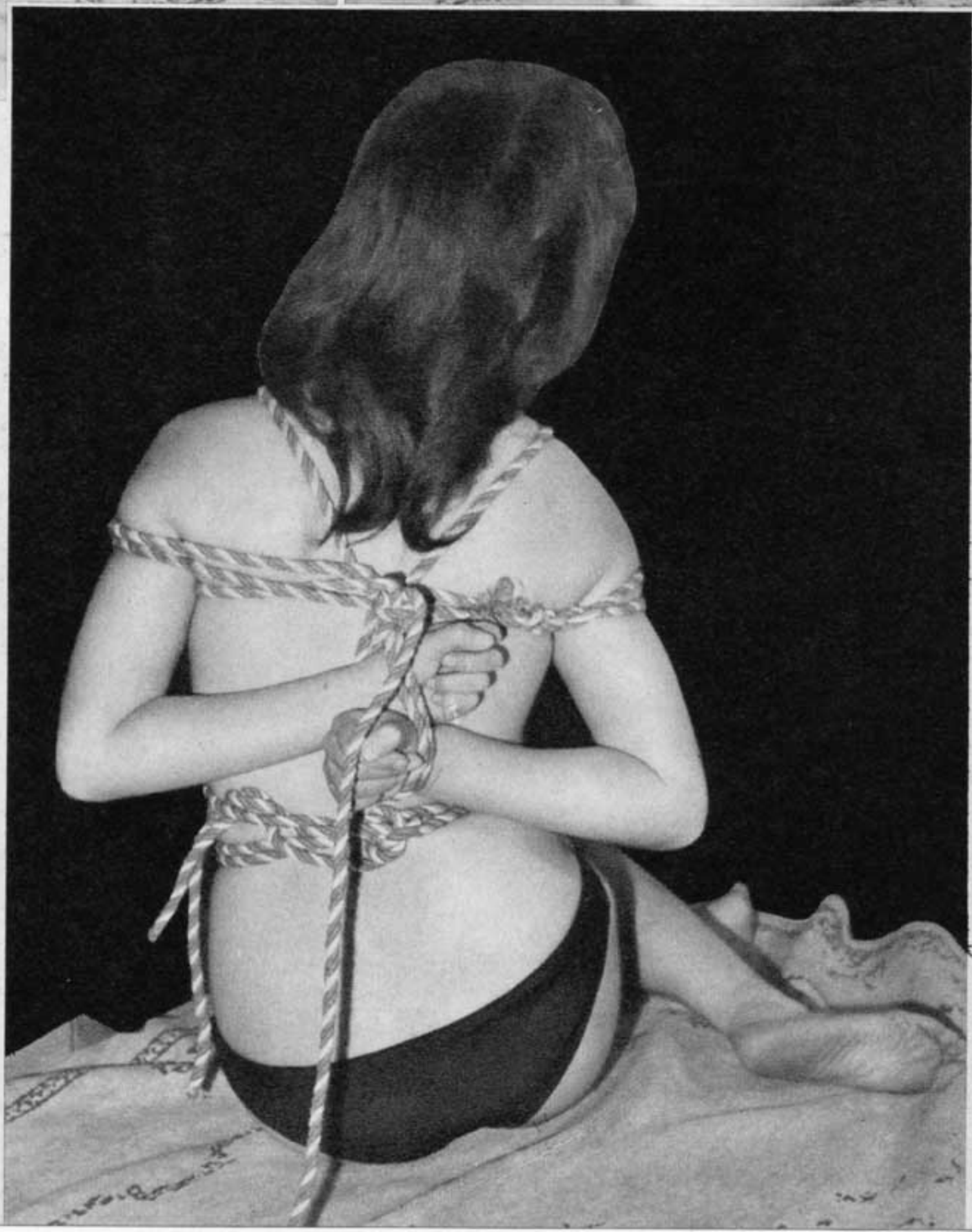
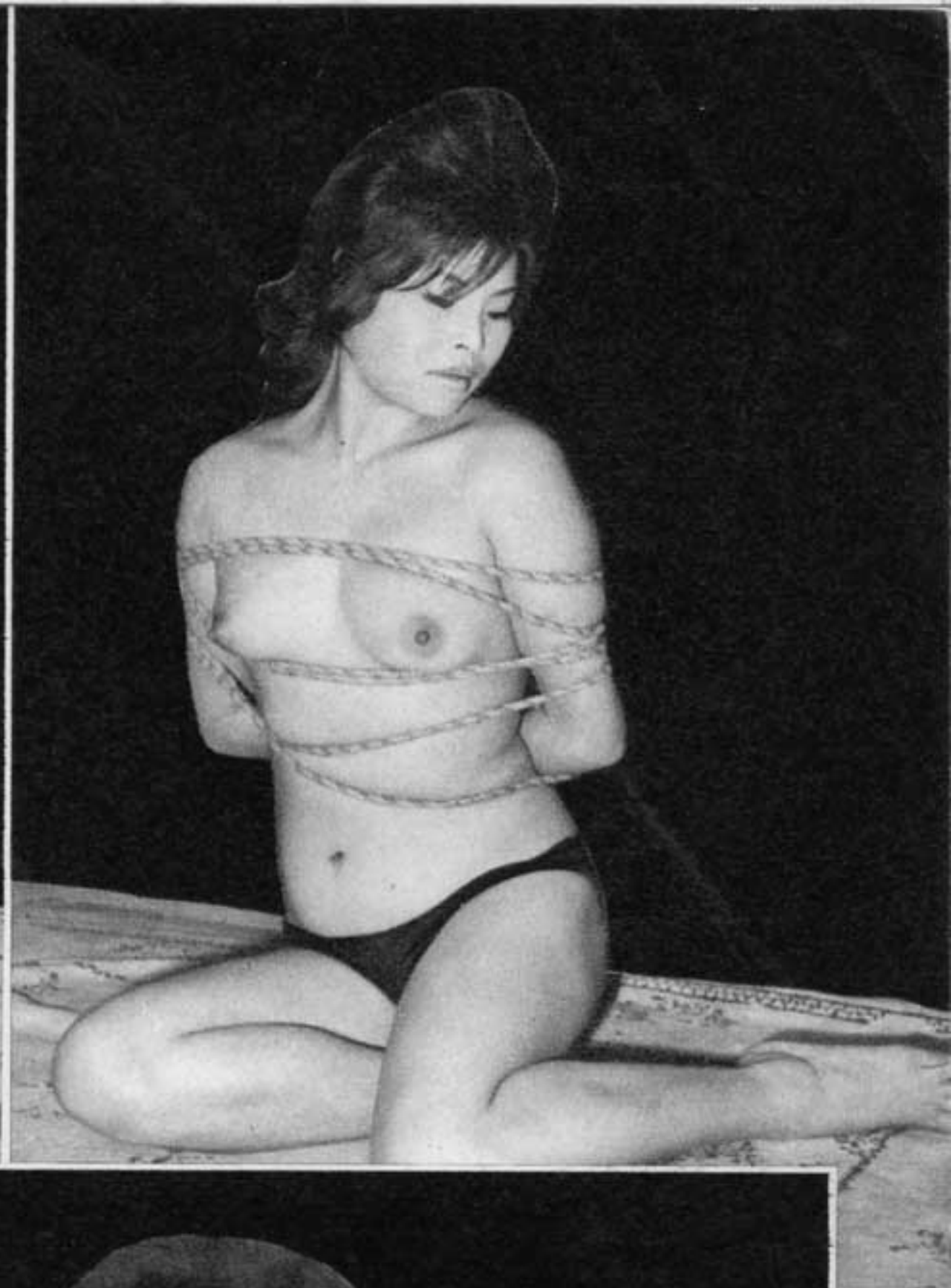




テーブルの残虐

垂れ下がる頭に 血がとんとん下がり 意識が いつのまにか ポ
ーツと遠のいていく 手と足は テーブルの四つの脚にくくりつけ
られているので どうにも逃がれようがない 無残で美しい一コマ





恋縄の姿態

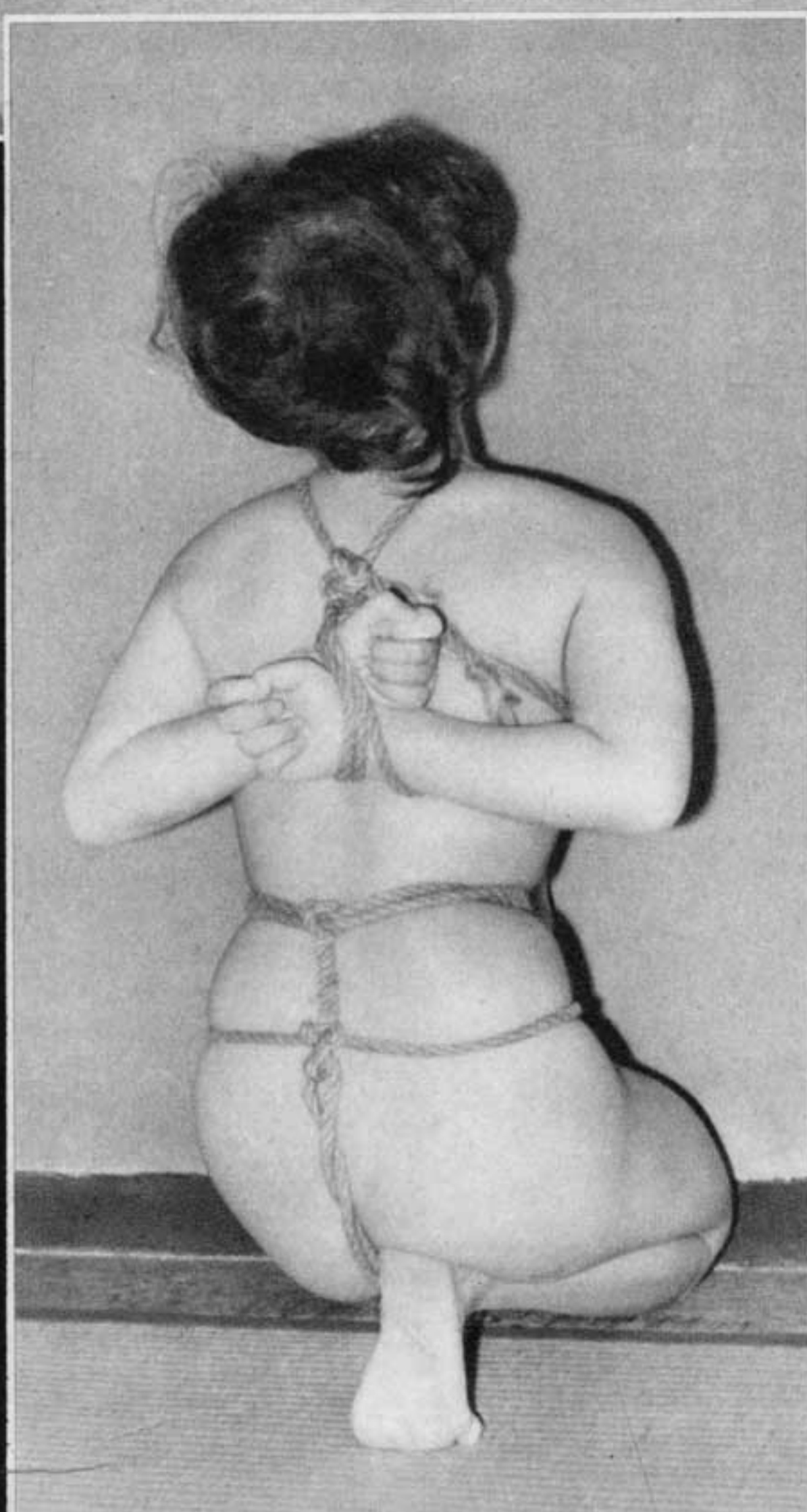
女の肌が 縄を恋い 女のところが 縄をし
たう そういう性質が 女の宿命かもしれな
いが とにかく 縛られるとき 女は 奇妙
な美しさに輝く 不思議な艶につつまれる
だから 女は 縄をほしがり その拘束の姿
態のなかで 自分だけの感覚にひたり 静か
に高まってくる官能に すべてを忘れて 没
入できるのだ 縄が女をよび 女が縄をもと
めるのが輪廻なのだへモデル・風早由美子へ

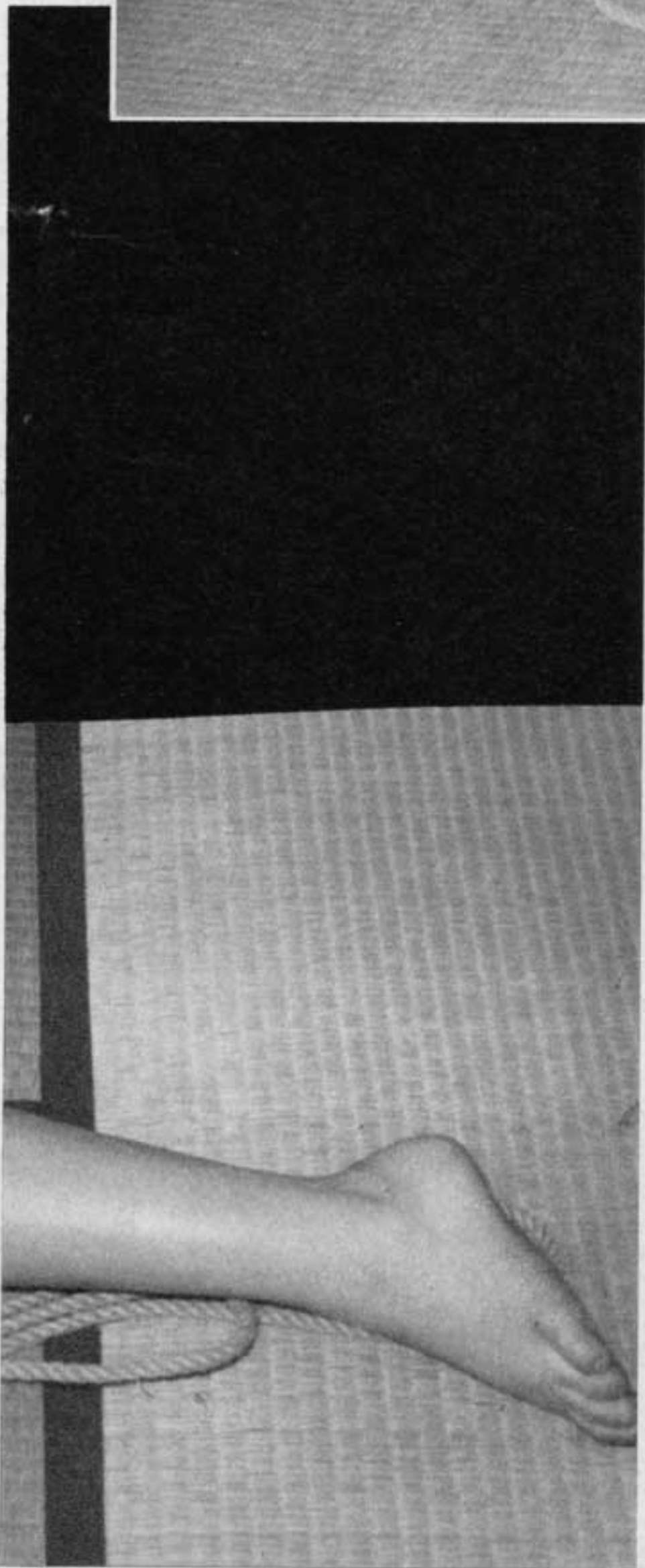
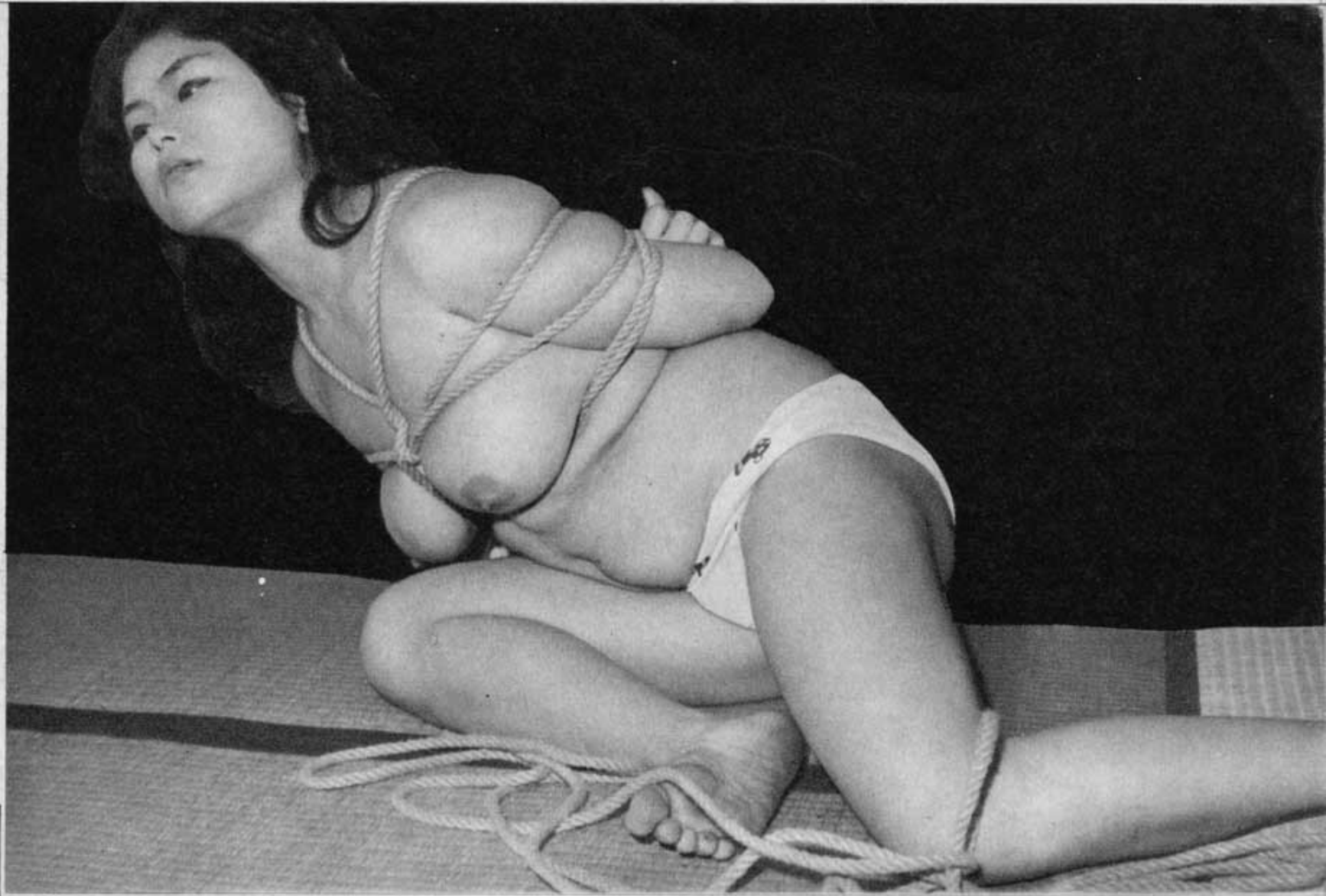


股 しばり

女のからだで いちばん大切なところ いちばん
敏感なところ そして いちばん柔らかいところ
そこを責めるための股しばり 女は 粘膜を責め
られる苦痛と 与えられる刺激の快さに 光と影
のような陰影に色とられた情緒に 思わず 身を
よじつてもだえ からだ全体で 身内にあふれて
くる感覚を 受けとめるへモデル・西牧えり子







縄にもだえる

縄がしめあげると ポリユームのあるオ
ツパイが プルンとゆれる そして 身
もだえる それは 歓喜の息吹きであり
官能のため息だ ヘモデル・西条さくら





鏡の前で

縄られて鏡に向かうと 鏡の中でも縛られている

ドブを散歩

江馬美久・え

首カセ足カセ クサリをつけて それもハダ
カのうしろ手縛り ドブをヨチヨチ散歩です。





物干し場の責め

江馬美久・え

物干し綱に髪の毛しばり 乳首は物干しバサ
ミで責める おまけにスリッパが口をふさぐ



女が、顔を突き出してのしつていた米兵の頬を、思い切り平手打ちした。そして、身をひるがえして逃げ、ハイヒールをはいて、参観路の入り口のほうへ駆け出した。

私も、何やらわからずに金閣を下りて、池畔を駆けた。しかし女に追いついたときは、すでに足の長い米兵が追いついていて、女のまっかな外套の胸倉をつかんでいた。

そのまま青年は私のほうをちらりと見た。女の炎いろの胸もとをつかんでいた手を、軽く離れた。その手にこもっていた力は、尋常なものではなかったらしい。女は、仏倒しに雪の上に仰向けに倒れた。炎いろの裾が裂けて、雪に白い素肌の腿がひろがった。

女は起き上がろうとしなかった。下からじっと、雲つくような男の高所の目をにらんでいた。私はやむなく、ひざまずいて、女を助け起こそうとした。

へい、と米兵が呼んだ。私はふりむいた。足をひろく踏んばった彼の立ち姿が目の前にあった。指で私に

女の腹を踏む

—三島由紀夫作「金閣寺」より—



合図していた。うって変わった暖かい、うるみのある声が、英語でこう言った。「踏め。おまえ、踏んでみろ」

何のことも私にはわからなかった。しかし彼の青い目は少しも残酷ではなかった。それを、その瞬間、世にも抒情的だと感じたのはなぜだろう。

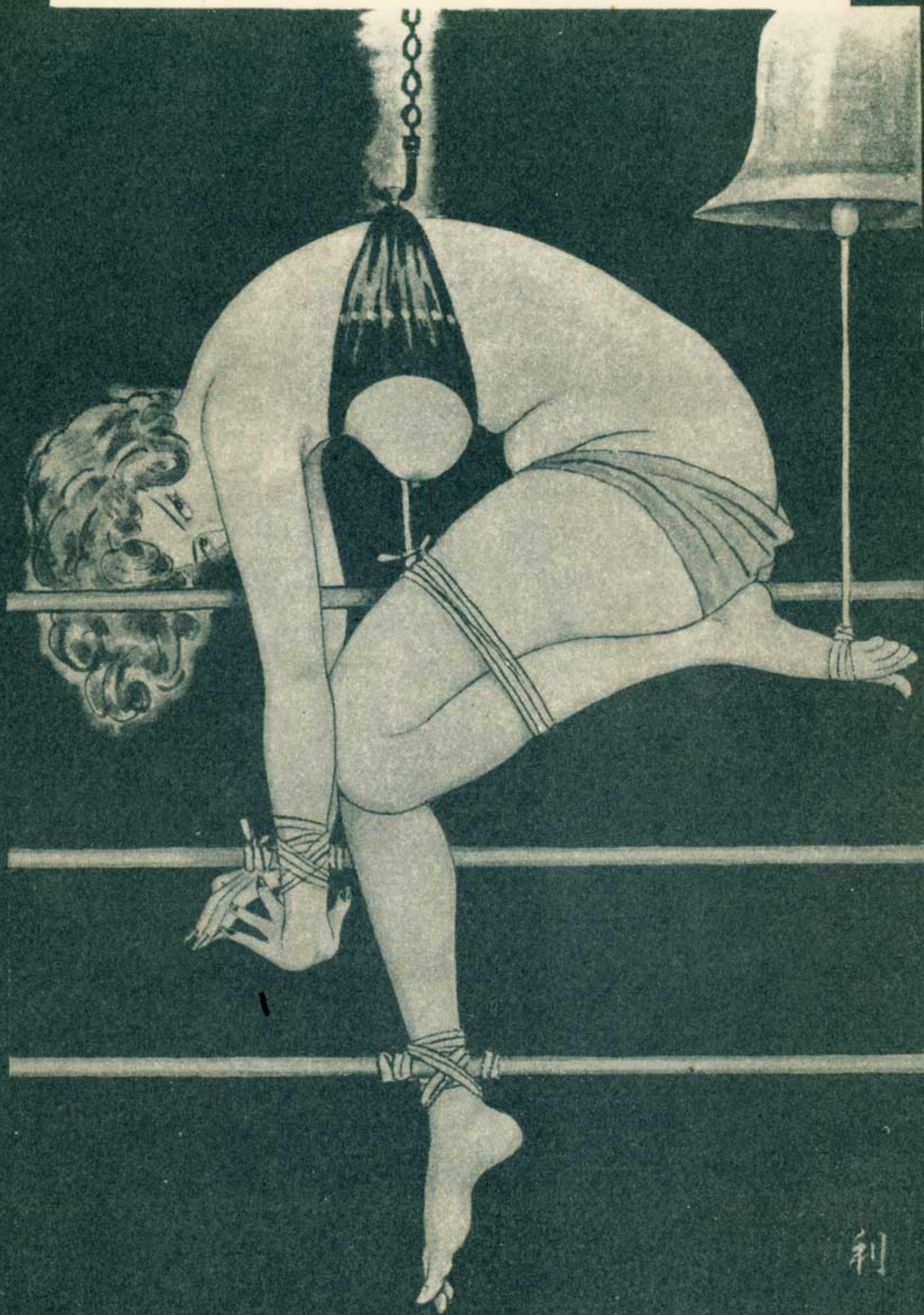
彼の太い手が下りて来てえり首をつかまえて私を立たせた。しかし命ずる声音は暖かく、やさしかった。

「踏め。踏むんだ」

抵抗しがたく、私はゴム長靴の足をあげた。米兵が私の肩をたたいた。私の足は落ちて、春泥のような柔らかいものを踏んだ。それは、女の腹だった。女は目をつぶってうめいた。

「もっと踏むんだ。もっとだ」

私は踏んだ。最初に踏んだときの異和感は、二度目には、ほとぼしる喜びに変わっていた。これが女の腹だ、と私は思った。これが胸だ、と思った。他人の肉体がこんなにマリのように正直な弾力で答えることは想像のほかだった。



利

吊り下げ女

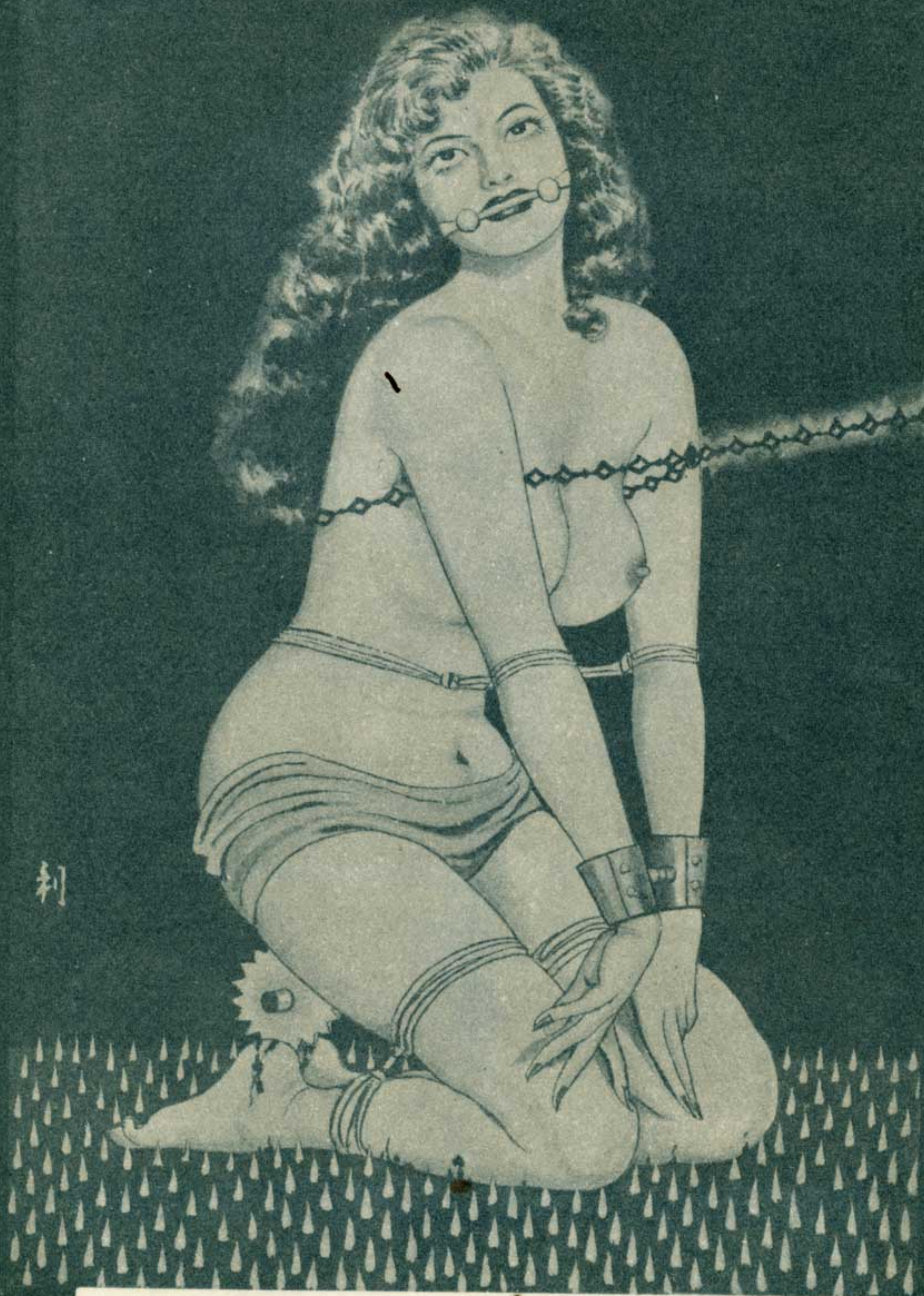
小田利美・え

乳カセで吊られた女は クリスマスの夜の飾りものだ

針の床

小田利美・え

針の床にすわって お尻には齒車 無残至極の責め場



利



女体を襲うヘビ

田上恵子・え

縄の悶悦

縄が 苦痛をよび 陶醉をかきたてる 異質の二つの情感がない合わされて

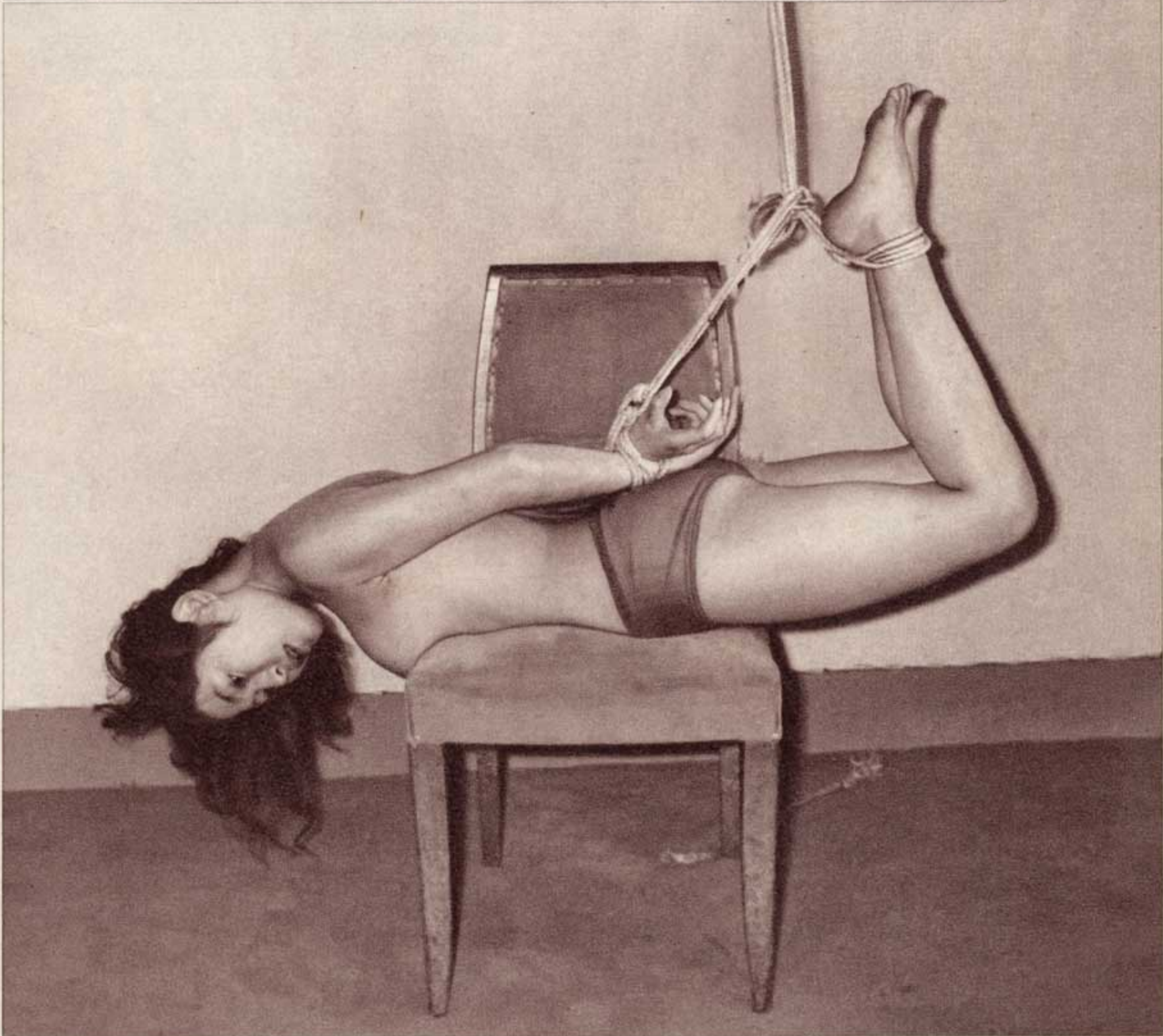
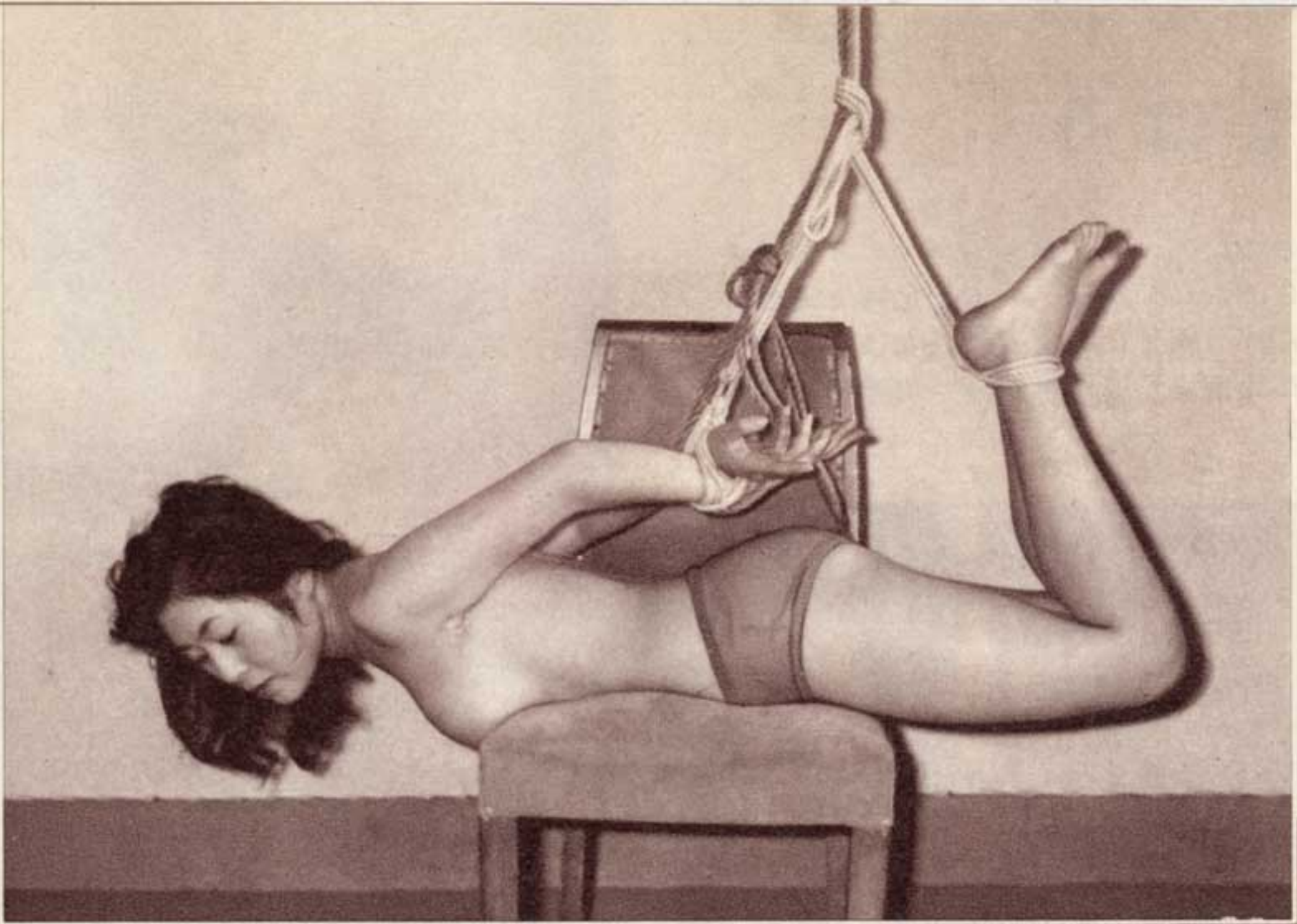




椅子しばり

腕のつけ根にベルトをかけて うしろ手に
しばられ 足は ももと足首で縄でく
ぐられ 椅子に固定された女は この限
られた世界で 何を夢み 何を考えるか

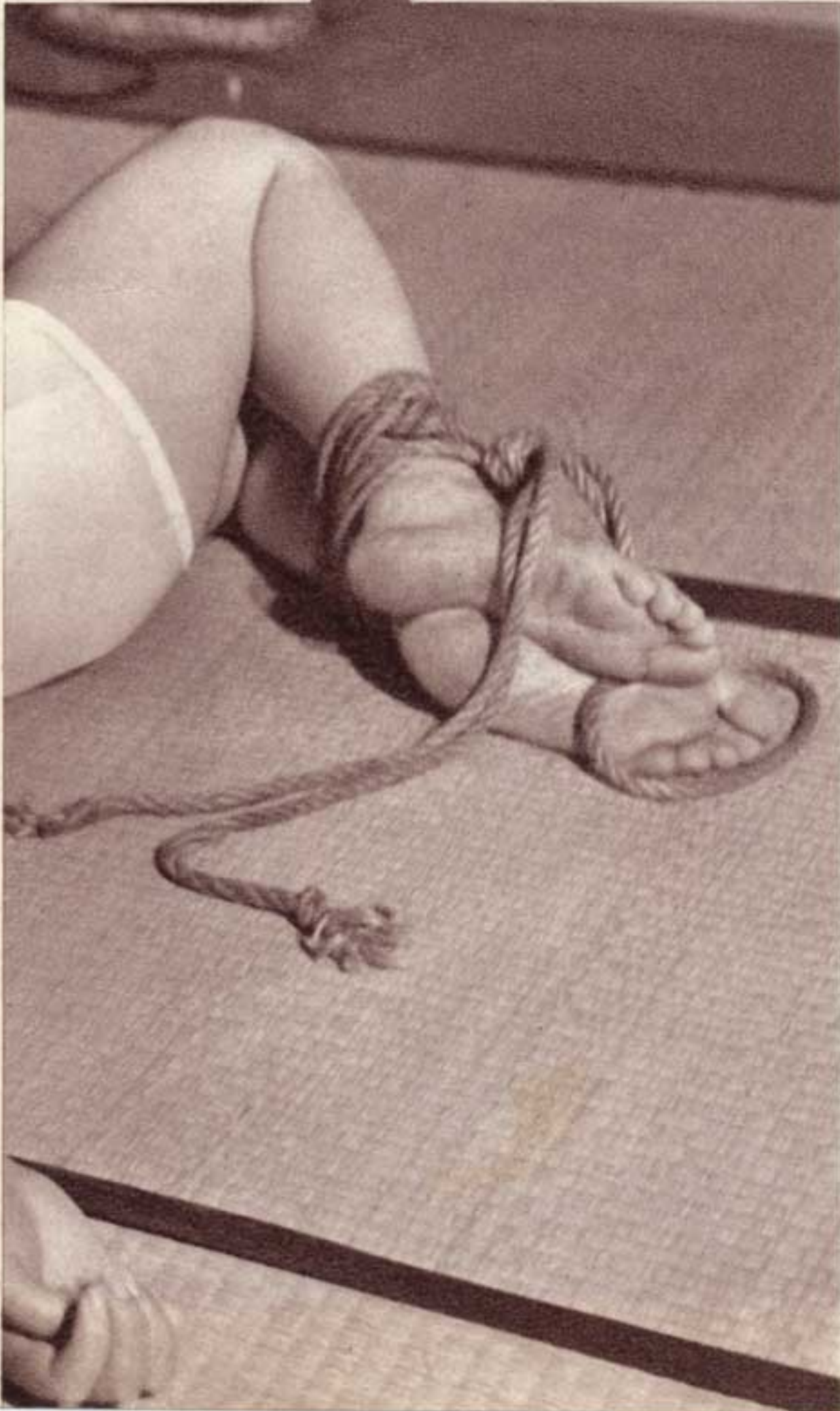




吊りの姿勢

椅子をどければ 手首と足首に体重
がかかるが 椅子があっても苦しい





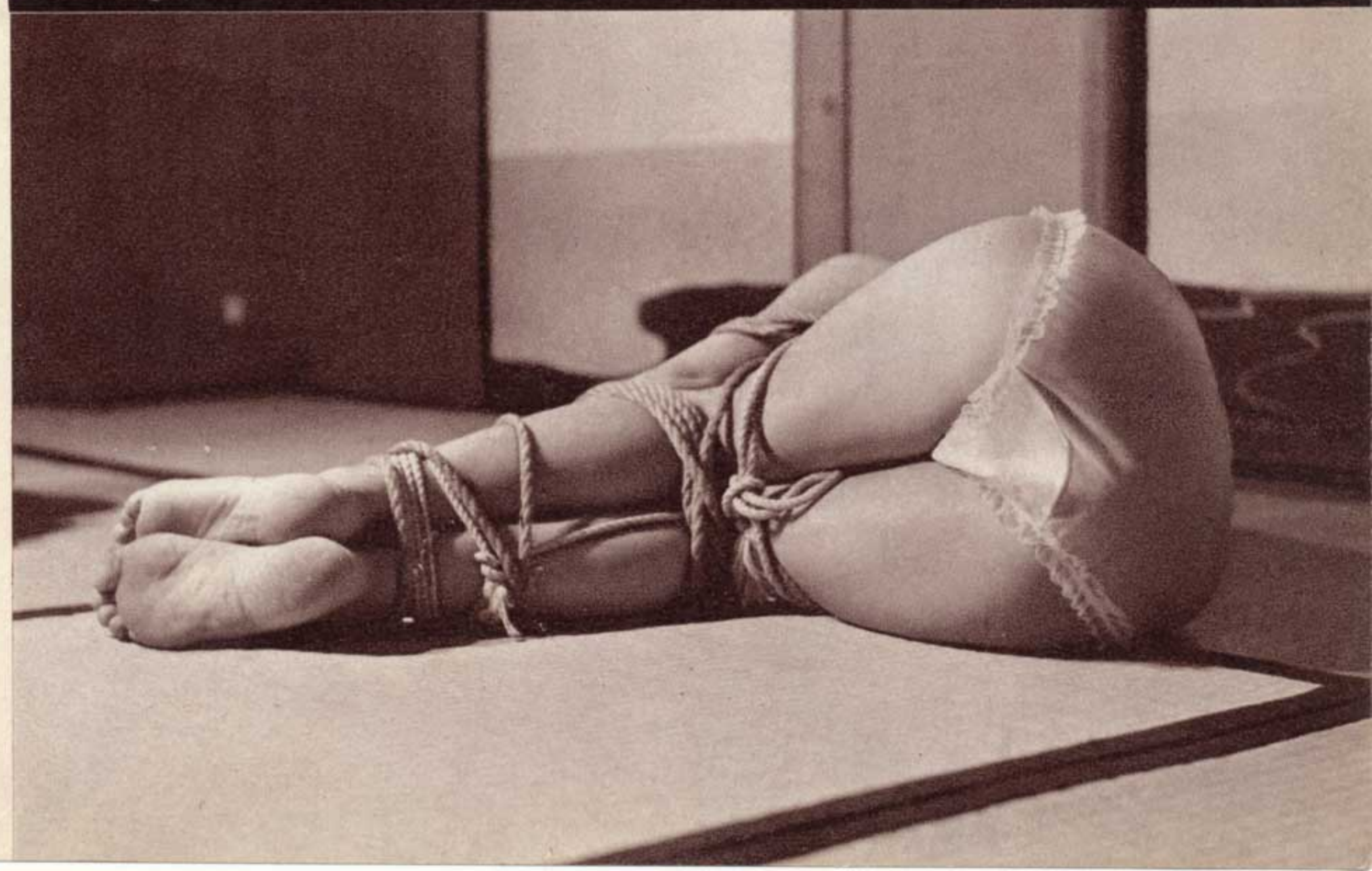
嗜虐ふたりプレイ

大きな女が縛られて 小さな女にいじめられる
くびを両足ではさまれた首じめ 腹にグ
ッと足を踏みかけて 足首にかけた縄を思い
きりひっぱられると 苦痛は内臓を駆けめぐ
る そこで 上になった小さな女の 長い黒
髪をつかんでひっぱる 髪の毛は女のいのち
だ ひっぱられれば痛い いじめ いじめら
れる嗜虐のたわむれの これは 妖美の世界

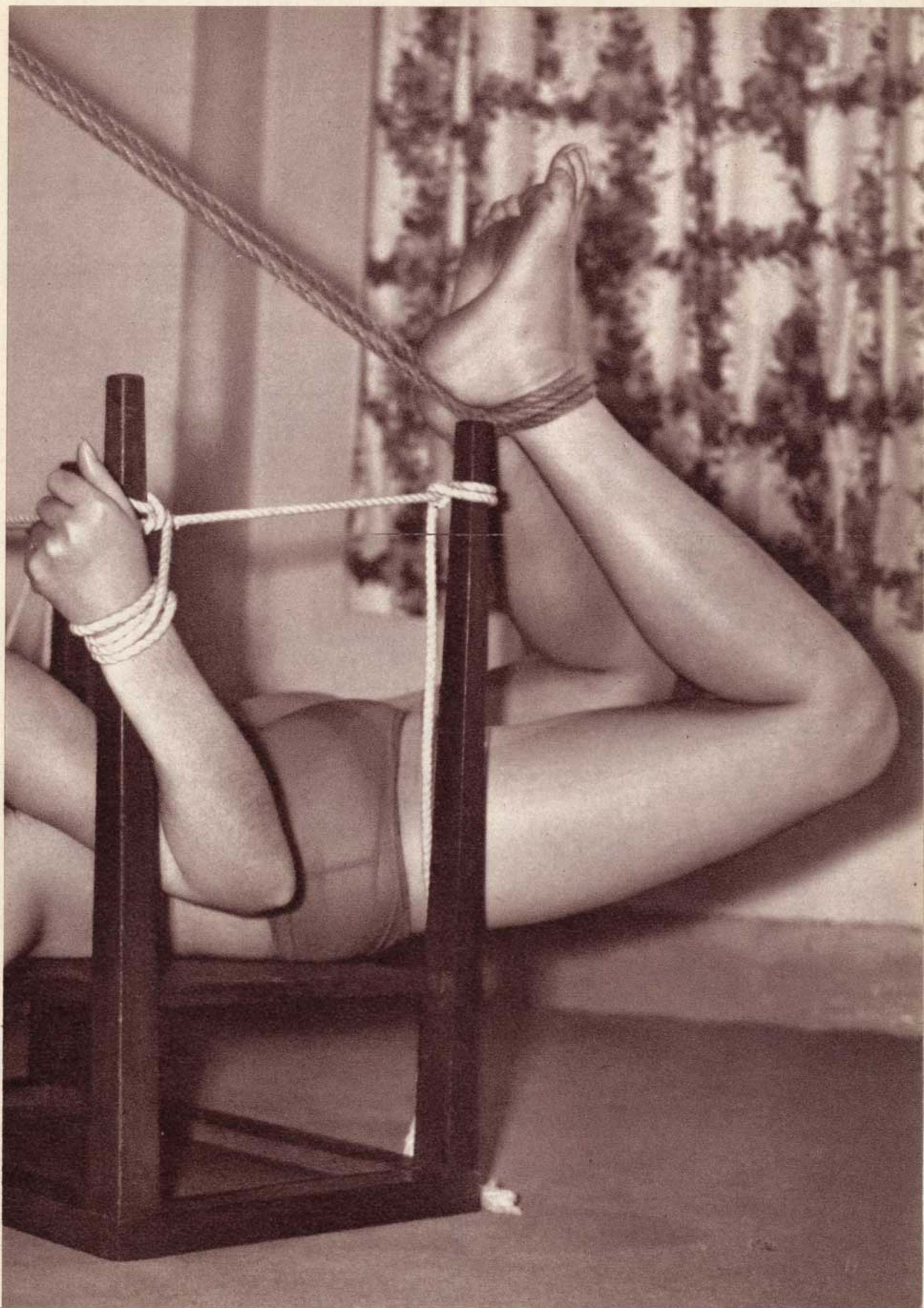


手と足をぐるぐる縛り

手と足を合わせて ぐるぐる巻きにされた姿勢でころがされると
き 水からあげられた魚のように あわれで 変になまめかしい





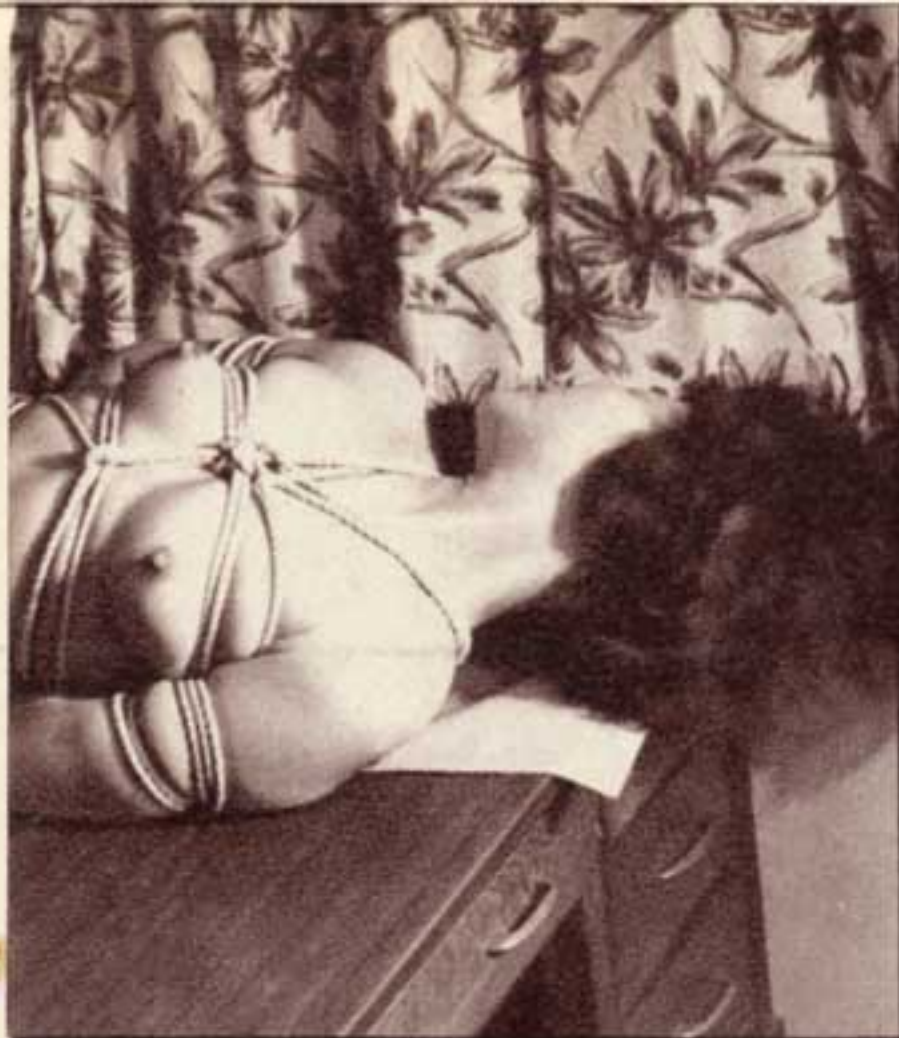




そり固めの拘束

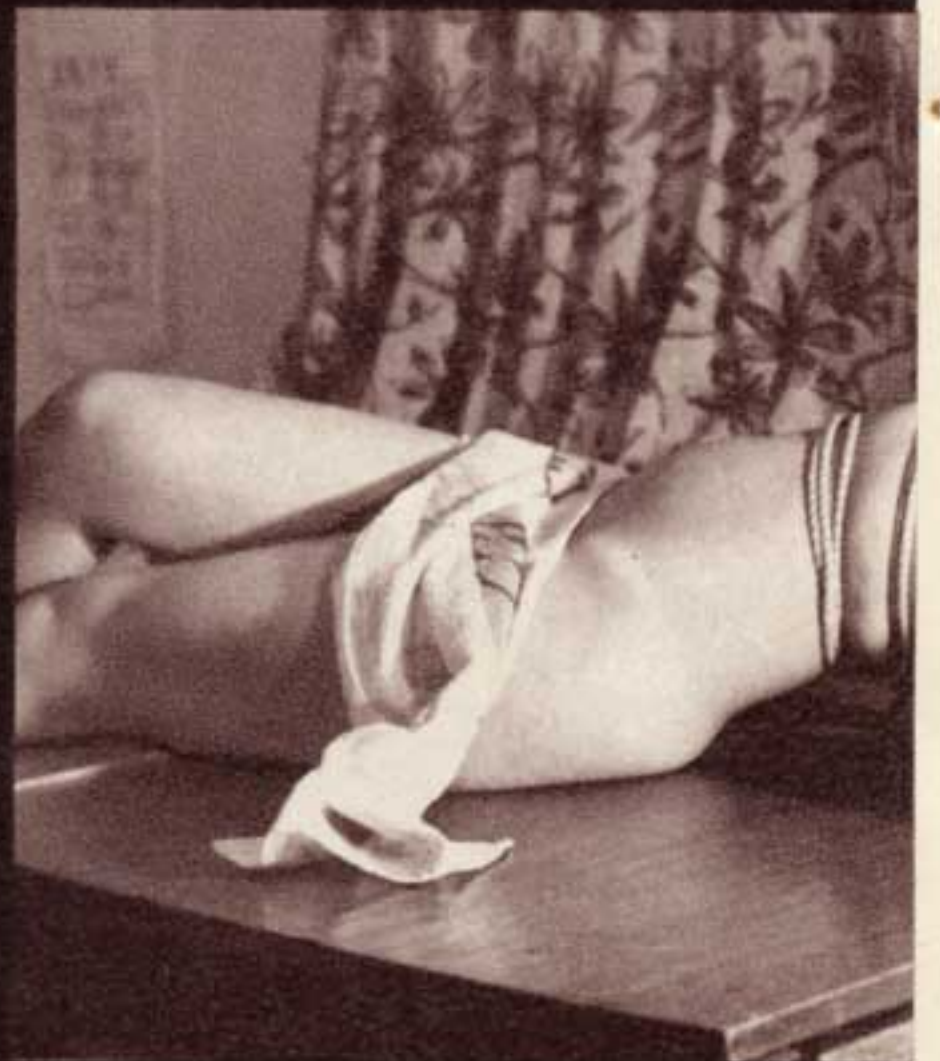
さかきにした小テーブルの四本の脚に 窮屈な姿勢でそり返り くくりつけられた女は 身動きひとつできないポーズで どうにもならぬ思いをかみしめている





事務所の虐待

人気のない事務所で 縛られた女は
胸に太いきりを立てられ のけぞっ
て避けているが 顔を下ろすわけに
はいかない 静かな責めの 残虐さ



鞭打 10 の ア・ラ・カルト









きびしい教育（エイメ・ヴァン・ロッドの『鞭の魅惑』という物語に添えられたさし絵）







きびしい母親 (小説のさし絵)



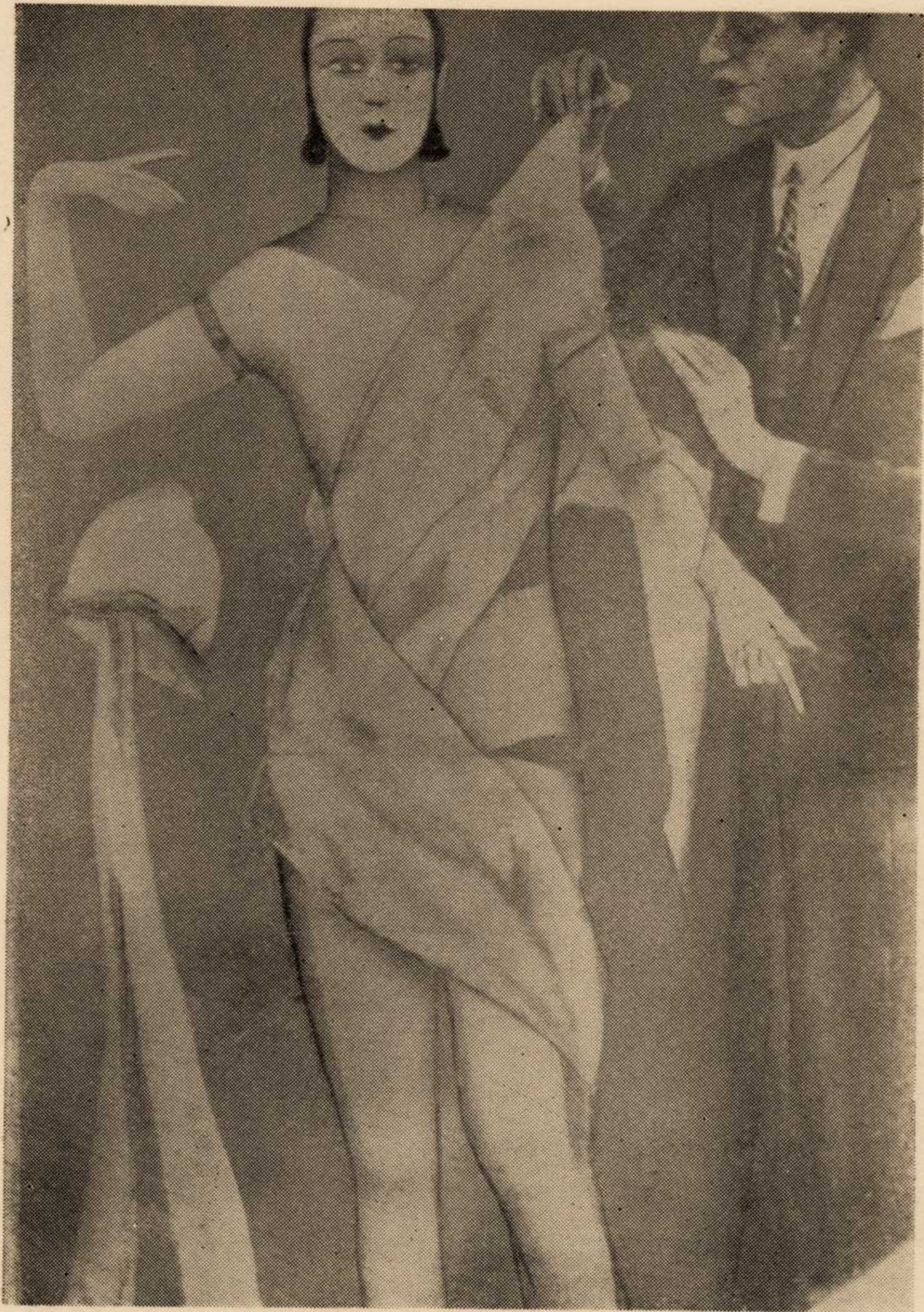
警察での拷問（フランスの雑誌『ル・リール』に掲載されたたさし絵）



1790年に発表されたイギリスのペン描きの諷刺画



街頭の痴漢



美 し き 人 形 (洋装店のウィンドーにあるマネキン人形に魅せられた男)

フォン・カプス筆の水彩画



広場の立像を愛する女（小説のさし絵）



女性の臀部フェチシズム

(リンツ市在住のA・パヒンガーの案で、F・ヘルマノフスキー・オルランドが描いた)

女を縛る

夫計多場番
え子恵上田

■木に縛る

立ち木を抱かせて、手カセ、足カセをクサリでつながれた女。その立ち木をナタでけずる男。

ナタが木の肌をくだくたびに、女のからは、ズルッ、ズルッとずり落ちる。しかも、でこぼこの木肌が、女の柔らかい肌をこすり、苦痛が、時とともに、からだの奥から、湧きあがる。



■縛ってムチ打つ

下半身をわずかに布きれでおおうだけの姿態で、足を柱にしばりつけられた真佐子は、日課になっている夫の嗜虐がはじまるのだと、覚悟を決めた。

——思い出すと、いまから三年前。モデルとして、画家の田崎のアトリエを訪れたときに、この、倒錯した仕置きを受ける運命の扉が開かれたのだった。

その日、真佐子は、全裸で、モデル台に立った。田崎はカンバスに向かってブラシを走らせながら、いつか、画境三昧に没入していったように思えた。

だが、三度目の休憩にはいろいろとしたとき、真佐子は、田島の目の色に、異様な光のあるのに気づいて、わけはわからず、慄然とした。

その瞬間、田崎は、真佐子にとびついて、アッというまに、彼女をしばりあげてしまった。そしてムチをもち出して、彼女の肌に打ちおろした。

見る見る、真佐子の肌に、赤いスジが走り、ミミズのようにのたくった。

田崎は、サド・マニアだったのだ。



■木馬に縛る

三角木馬の、鋭角の背が、雪江の、女としていちばん大切なからだの一部に、するどい苦痛を与えている。その痛みは粘膜に加えられるので、苦しまぎれに身動きするたびに、加速度的に、からだの中心を貫くようにひびく。

うしろ手にしぼられ、足首にはオモリを吊るされているので、のがれることもできない。ただ、鋭角の上で、苦痛に耐えることだけが、彼女に与えられた環境であり、宿命ともいえる。

その肌に、突然、ピシリッ！ と皮のムチが、引き裂くような音をたてた。

ウッ——一瞬、息のつまる感じで、雪江がうめいた。

つづいて、ピシリッと、いう音とともに、ムチは、ヘビのように、何度も、彼女の白い肌に巻きついた。

雪江は、気が遠くなる思いにとらわれた。そして不思議なことに、彼女は苦痛を感じなくなった。それとともに、奇妙な、甘美な感覚が、頭に駆けのぼるのを感じ、陶然とその感じを噛みしめた。



■壁に縛る

アアーッ！

美代の口から恐怖の叫びがあがる。

両手を、壁にとりつけた鉄輪にとめられ、パジャマ一枚のしどけない姿で、美代は身もだえする。身もだえにつれて、パジャマの前が割れ、裾が乱れて、プツクリした乳房がのぞき、まっ白い太ももがあらわになる。

その肌に、多吉が、刃物をふるう。鉛筆をけずる小さい刀だが、先が、するどくときすまされている。

するどいきっ先は、肌にふれても、痛みを感じさせない。だが、肉まで深く切っている。

やがて、スーッと、細い細い赤い線が浮かび、次第に、それがふくらむと、ふつふつと血の玉が肌に生まれ、肌を流れる。そのときになって、するどい痛みが美代の感覚として受けとれる。

アアーッ！

小刀が豊満な乳房を切りさき、血を流したたらせる。だが、壁に固定された美代は、逃げることはできない。



■柱に縛る

太い柱にうしろ手にしばられ、足はひろげて竹の棒にくくられた誠子は、いわば一種のハリツケの姿勢だ。むき出しの裸体に、夜の空気が、痛いほど冷たい。もう、このままの形で、誠子は、三時間を過ごさせられている。冷えるから生理的現象として、排泄の衝動に駆られるのだが、女の羞恥は、それを我慢することと懸命である。

苦しい、苦しい時間が流れていく。

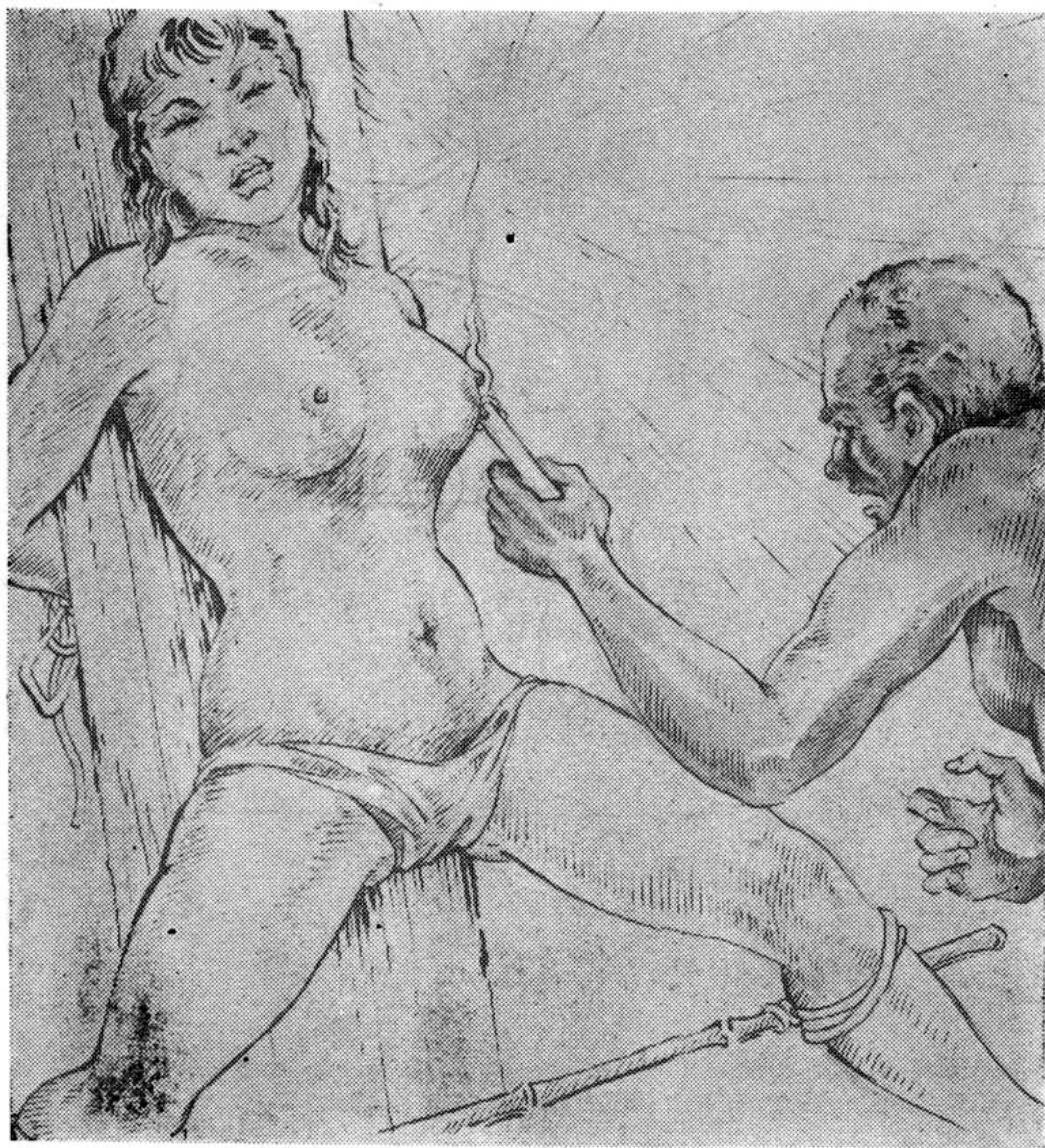
と、ドアを開いて、怪奇な容貌の男がローソクを手にはいつてきた。

室内が、ポツと明るくなり、静かだった空気が、ゆれて、ローソクの炎が、ゆらゆらした。

男は、誠子に近づくと、不気味な笑いを浮かべて、ジーツとねめまわすように全身を眺めた。

サッと男の手がのびたと思うと、ローソクの火が、誠子の乳首に当てられた。

ウッ！ 思わず息をのんだ誠子の顔は次の瞬間、苦痛にゆがんだ。肌のこげるいやなにおいが部屋を満たしていく。



ムチに魅入られた女

田 木 啓 介

小 田 利 美・え



縄と



■ 1 ■

あけみは、夫の元木が会社に出る時間になると、ホツとする。前夜の屈辱と羞恥にいろどられたプレイの疲れが、朝になると、まぶしいほどに五体を消耗する。しかし元木は、いつものように快活である。親子ほど年齢の違う若いあけみと結婚したものの、正常なセックスをもてない元木は、あけみに最初の夜から異常な性愛技術を教えこんでいった。

だから、二年間の年月も、あけみは完全な処女であった。不思議なことに、あけみ自身も別段、元木にセックスを求める様子もなく、ただ夜がくれば、なんとなく恐怖じみたおののきとともに、元木を待った。

「今夜は会議で遅くなるかもしれない」

こんな電話がかかってくる夜、あけみは期待を裏切られたように悲しくなってしまう。

（そうだ、自分で縛ってみよう）

湯上がりの豊かな姿を鏡に映しながら、あけみは、元木から教えこまれたように麻縄をからだに巻きつけ、手足を縛ってベッドに横たわった。

元木は帰宅して、あけみの姿を見たとき、てっきり強盗に襲われたものと思い、ベッドにかけよった。美しい裸身が汗ばんでうごめいている。元木でさえ、あけみを全裸にすることはなかった。

「あけみ、どうしたんだ。さあ、言ってごらん」



疑惑を抱き、目をすえて
まじまじとのぞく元木の姿
を見ると、あけみは、遅く帰
って来た罰に、からかってやろ
うと思った。

あけみは、急に身をよじらせ、
両腕を元木に押しつけながら、泣き
はじめた。

「パパ、ごめんなさい」

「……あけみ？」

「殺すっていうの……しかたがなかったの
よ」

そうきくと、両手をあげたおおぎょうな格
好の元木が、頭をかかえてあけみの裸身に倒
れた。

■ 2 ■

元木は、あけみに疑惑をもったまま、日
夜、会社にも行かずに責め抜いた。白痴のよ
うに目をうつろにした姿が、一時もあけみの
裸身から離れようとはしなかった。ひどいこ
とは、あけみの食事もトイレも、すべて元木

に指示されることだった。

とうとう最後の日がやって来た。

元木は深夜、若い男の訪問を受けたのであ
る。いふなれば泥棒である。

男は、ドアの鍵穴から見た二人の異常な愛
撫に硬直していた。

あけみがうめき、悲鳴をあげて、元木の狂



いかけた責め苦を受けながら、裸身を開いた。
「ギャーッ」

死ぬほどの絶叫が起こった。口を血だらけにした元木が、ヨロヨロと立ち上がった。あけみは苦痛に身もだえして、ベッドからころげ落ちた。

「ウムッ、ア、アッ」

デク人形の糸が切れたように、元木が転倒した。男はドアをあけた。

びっくりし合ったあけみと男は、血泡を吹いてけいれんする元木の姿を見つめた。

「死

ぬん

だわ」

あけみ

のことばに

男はうなず

いた。

■ 3 ■

死体と三



日間、男は、放心したあけみと奇妙な生活に入った。

落ち着きを取り戻したあけみは、元木の黒ずんでゆく姿に耐えられなくなった。

「あなたは誰？」

男は、金目のものをバッグにつめこんでいた。

「お前の首輪とその指輪を出しな」

「え？」

あけみは、男の低い声に圧倒されてしまった。

「泥棒さ。おまえ

は人殺しだろ。早く出しな」

手首を引き寄せた男の腕に、あけみが噛みついた。

「痛てッ、おい、離せッ」

「この家のものはみんなあたしのものだ。おまえなんかにやるもんか」

「おい離すんだ。ひどい目にあわすぞ」

必死に噛みつくあけみのヒ腹を、思いきってつけた。

「あーッ」

床に投げとばされたあけみが、物欲の執念そのものをみなぎらせて立ち上がった。

「しぶとい女だぜ」

男はもう一度ねじ伏せて、両手をうしろ手にくくり、ベッドに運んだ。

「チクショウッ」

身もたえする濃艶な姿態が強烈に男に迫った。伸びきった若い肢、そして豊かな丸みの腰、なによりも男を知らぬ美しい肌の輝きが、もえあがった。

「あっ……いやッ」

あけみは一人でベッドにのたうった。

「ぶってッ、あたしは悪い女なの。おねがいだから、その竹で、死ぬほど打ってッ」

男は、思い出したようにニヤリと笑った。下着を丸めて、あけみの口にさしこんだ。

「死ぬほどな」

あけみの涙にうるんだ目がうなずいた。





ピシッー
姐上の白魚がとび上がった。重量感のある肉体が、竹を手にした男の手にしびれるように伝わって来た。

ピシッー！

油汗のにじむ右手をもちかえた男は、上段に竹をふりかぶって、ハッシとあけみの腹に打ちすえた。

「グエッ！」

血が天井にまでとびちって、ヒ腹がひき裂けた。目をむき出したあけみがうつ伏せになった。

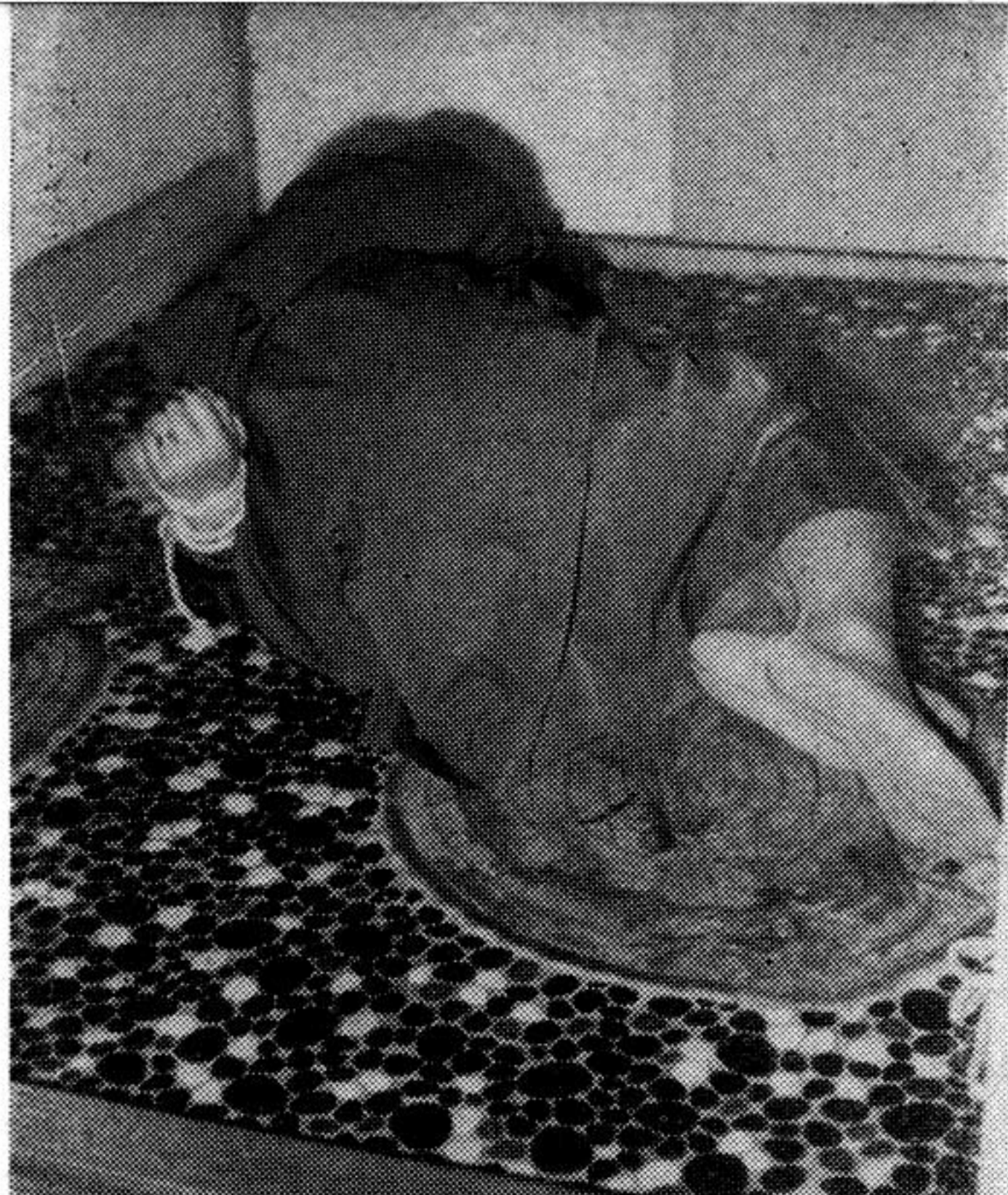
「助けてッ」

男は、悪臭のする元木の死体をかかえると、恐怖に身をよじるあけみの中からだに重ねた。

消される女

三村次郎

私が、その黒い男の訪問を受けたとき、もう逃げる力も勇気もありませんでした。
私は、長いあいだ、ヨコハマで、ペイのバイ人をしていました。それというのも、かつて私がクラブにいたとき、彼らには、たいへんいい客のひとりであり、そして、「白い魅惑」にとらわれて、おきまりの転落へといそぎましたが、けっきょく、私は、仲間のひと





りとして、逆にバイ人として、若い女たちをむしばんでいたのです。

ところが、私は、ある男と恋をしました。その男は、麻薬Gメンだったのです。私は、その男の愛にすべてを投げ出しました。私の仲間、私のボス、私たちのアジト、それにペイの隠し場所まで――。

私の知らない二日間に、それこそ、あっという間に、組織は根こそぎ壊滅しました。男は、それっきり私の前に姿を現わしませんでした。おそらく、手柄をたてて、再びまた私のようなおバカさんを捜しに行ってしまったのだと思います。

その黒い男は、どこからやって来たのでしょうか。前に一度、私は、ボスの家で見ましたがありません。廊下でパッタリ会ったとき、その黒い男の両手は、女のように細く、そして真っかに鮮血にいろどられていま

した。私は、浴室のドアに血が着いているのに気がつき、そっと中をのぞき込んだのです。大きなバスタオルにくるまれた女が、白いタイルの床に横たわり、胸から腹部にかけて、まだ血がふき出していたのです。

「あたしを殺しに来たの」

私は、その黒い男を室内に招きました。男は、黙って、ソファに腰をかけました。

「時間がないんだ」

男は、胸のポケットに手を入れました。

「支度するわ。それまで、ブランドイーがあるからお飲みになって」

私はベッドルームのカーテンをひいて、新しい下着に取り替えました。

男は、ステレオラジオにスイッチを入れてから、カーテンをはずし、首を出しました。

男は、私が巻きかけたサラシの腹帯を見て、意外な顔つきを向けました。

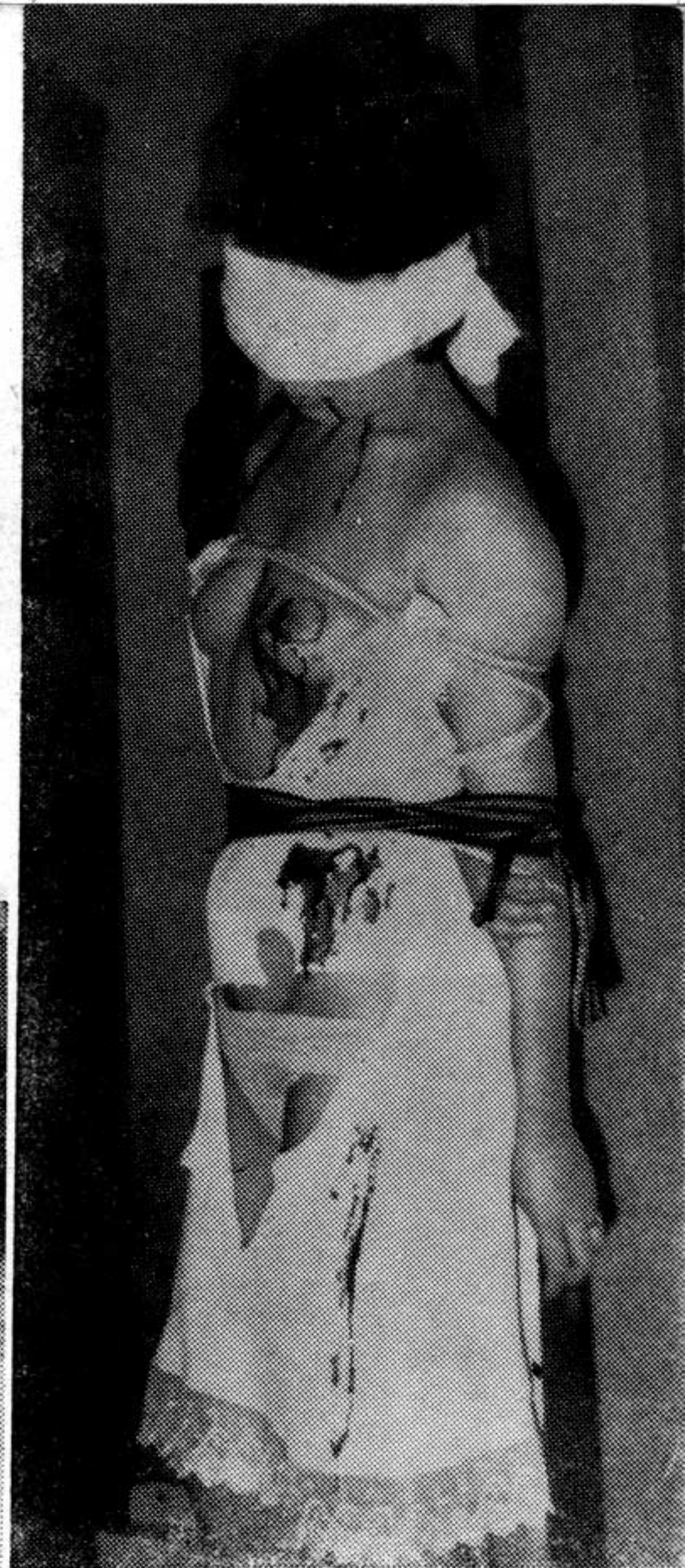
「妊娠しているのか」

私は、そのことばをからだ全身の羞恥で受け止めました。

「見ないで……」

五カ月の、ふっくらとしたふくらみが、躍るようにけいれんするのです。

「裸にしないの」



うな残酷さが、少しもないように思われたからです。

音楽も聞こえます。まして、その黒い男には、なんとなく鋭くて、たくましい男の体臭とムードがあるのです。

男の手が、乳房にふれ、腹帯のあいだに入ってゆきました。

「おなかの子供には、もう目がついているのかなあ」

いつか、浴室で殺された女の裸を思い出したのです。

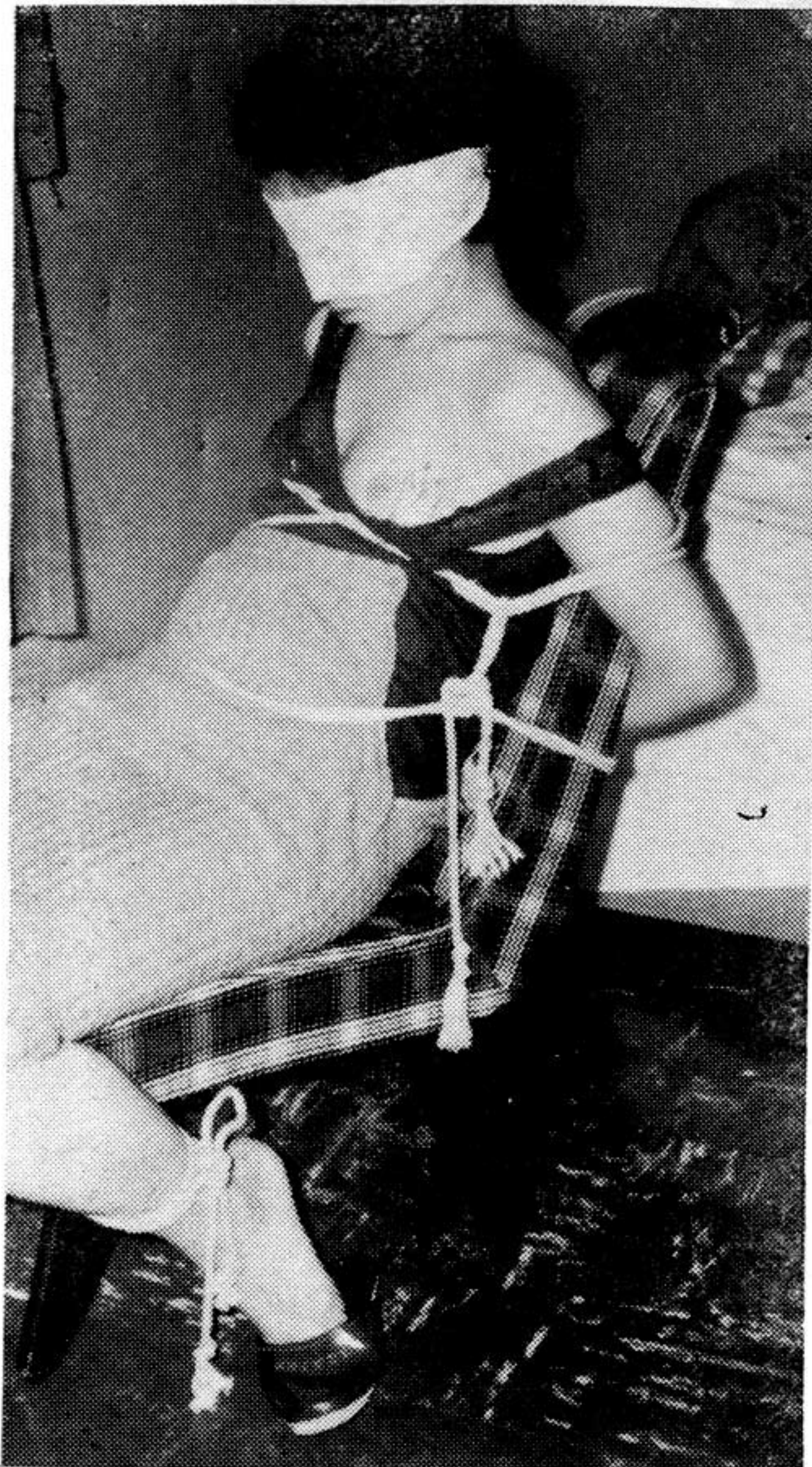
男は、ハンカチーフで目かくしをし、スーツの上着をひろげ、シュミーズのヒモを切りました。

「あッ……」

「まだ、何もしない」

「そう……そうね。でも、シュミーズが破られたんで、もったいないと思ったの。あたしって、どうしてか、とっても下着を大事にするの」

男は、私の耳たぶにキスをしました。私は、殺されることがひどくたのしいように思われました。突然、暗闇で刺されたり、無理矢理に犯されたあと首を絞められたりするよ





真面目な男のことばに、私はふき出してしまいました。

「もう、プロローグはおしまい。あなたのお仕事だわ」

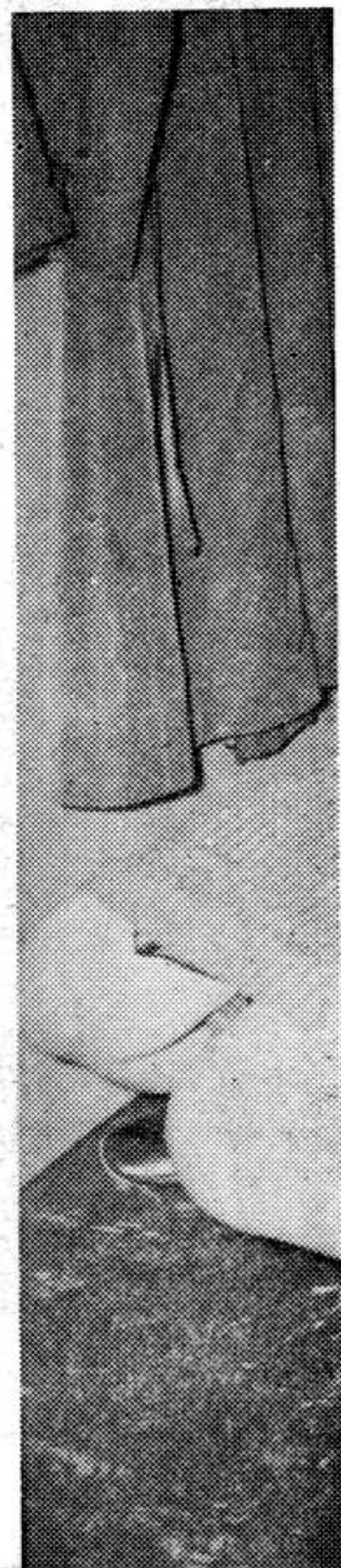
「ああ、そうだったな」

男の手がのびてメスを握ったようでした。それからずいぶん長い時間の静けさでした。乳房をつかんだ男の手に力がいり、もう一つ冷たい刃先が肌をすべったとき、私は、全身の力をためて受け入れたのです。

「……………」

男は、おおいかぶさるようにうしろから私を抱きしめながら、乳房の下を腹帯に向けて刺し込んだのです。

焼けた棒がグルグルと私のからだにめりこんでゆくのがわかります。止まらずに強く輪をえがきながら……………。



私のからだは硬直して、悲鳴をあげました。男は、メスを抜きかけました。刺すときよりも激しい苦痛で、いっぱいです。

一気に、私のからだから抜き出たメスが、血をしたたらせて、私の目の前に止まりました。

ゴボゴボと音をたてて熱い血がふき出のがよくわかります。もう少したつと、私は、死ぬのかも知れません。苦痛もやわらぎ、傷口からでしょうか、冷たい風がヒュウヒュウ音をたててからだを吹き抜けます。

黒い男が、私の前に立ち、ひざまずくような格好で、私の腹帯を解きはじめました。

「いけない…………いや、そんなのいやッ」
血だらけのおなかに男は、接吻したようです。そして、こんどは、それこそ私も最後まで意識することもできないような、大きくて深い死のメスが躍ったのです。

女の責め絵巻

田島末吉

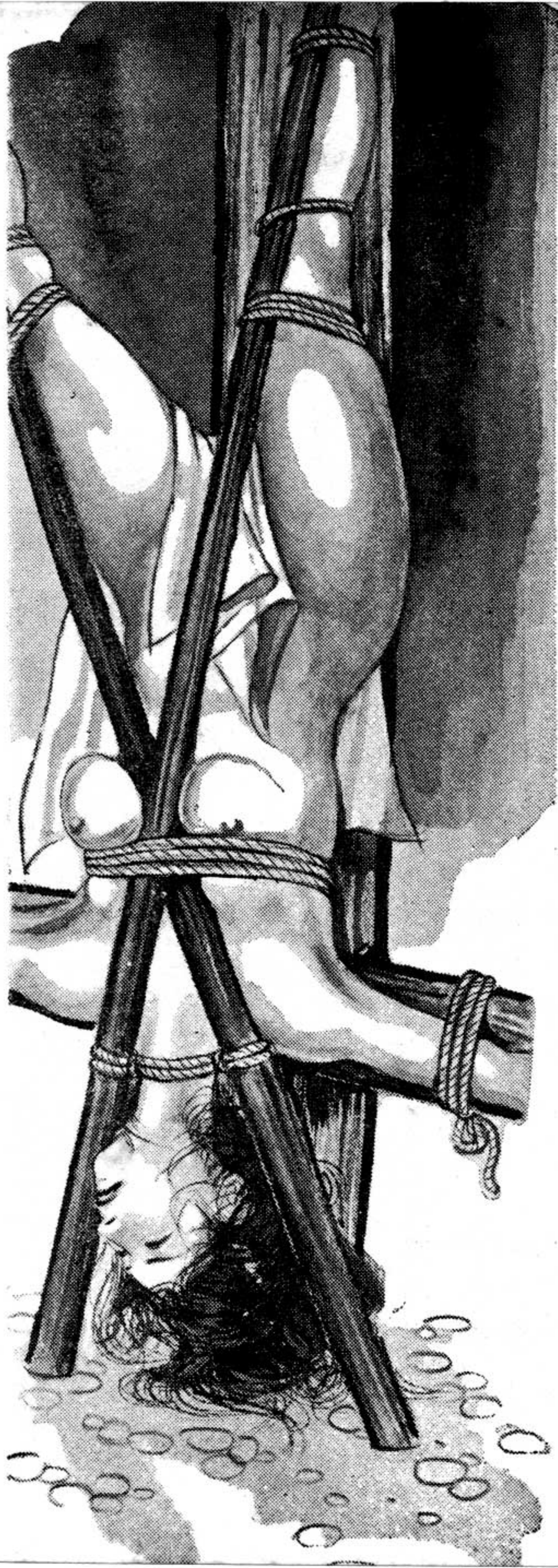
江馬美久・え

△1▽

「どうしても、いわないというのかえ」
中藺岩藤ちゅうりやうとうの声が、ヒステリックに高くなっ
た。

その岩藤の前で、身をちぢめてかしこまっ
ているのは、お女中の槇まきだった。

槇は、花ならば、開きかけのボタンのよう





に、あどけなさのなかに、におうような色気を感じさせる美しさだった。年は十八、いうならば、花恥ずかしい美女なのだ。

その美しさが、まず、岩藤には気にいらないのだ。自分はもう失って、二度と取り戻せない若さと美貌をもった槇が、とにかく、憎くてならないのだ。自分の手の届かないところの青春が満ちあふれているというだけで、岩藤にとっては、がまんがならないのだ。

その槇が、しかも、妊娠しているのだ。

それを知ったとき、岩藤は、カーッと、頭に血の上っていくのが、自分でもわかった。盛りをすぎた女が、若さにはちきれそうな女に対して抱くしつと心なのだ。

だが、岩藤は、その感情を、しつとは思わなかった。憎くてたまらない女が犯したふいだらが、よけい心にグサリとささってくる思いだった。

「不義はお家のご法度^{はつと}ということを、おまえは、まあ、なんとお思いかえ」

これが、岩藤の「大義名分」である。この口実で責めるかぎり、彼女は、だれに対しても、りっぱに応待できるのだ。

だが、槇としては、いまさら、おなかの子の父の名を、明からさまに言えるものでもない



い。いや、死んでも、その名は、口に出せないのだ。その男を愛すればこそ、その男のふためになることは、口が裂けても、言うまいと、心にふかく決めていた。

だから、岩藤からどんなに問いつめられようとも、黙否権をおすつもりだった。

〈2〉

「おまえが、どうしても、不義の相手の名をいわないというなら、わらわとしては、

奥向きの取り締まりに手落ちとなりまするゆえ、どんな手段に訴えても、言わせてみせませうぞ」

岩藤の声は、もう、自分を忘れて、むき出しに、若い嫁をいじめる、意地の悪いシユウトメさながらである。

しかし、槓は、どんなに問いつめられても口を開かなかった。

業をにやした岩藤は、端女に言いつ点多々あをせたい。槓をしばり上げた。

槓はしばりあげられても、少しの抵抗も示さず、もちろん、口もひらかなかった。

そんな槓の態度が、岩藤にはふてぶてしく感じられて、よけいカンを高ぶらせるのであった。

その感情をむき出しにしたまま、目をつりあげて、岩藤は、弓の折れをもって、槓に近づいた。

うつむいたままの槓は、岩藤の表情には気がつかなかったが、やはり何かの気配を感じて、ピクリとした。それと同時に、

ピシリッ！

弓の折れが、槓のからだに鳴った。着物の上からだったが、予告なしの一打は、こたえた。打たれるという気持ちに槓になかったの

で、心にもからだにも用意がなかったから。

弓の折れは、つづけさまに、槓のきしゃなからだに打ちおろされた。

そのたびに、痛さに身をよじるのだが、槓は必死に声のもれるのをこらえた。だが、弓の折れを、縄目にかけて乳房をぐいと締めあげられたとき、さすが気丈の槓も、思わず、ウームと悲鳴をあげた。

自分のしていることであおられたのである。岩藤は、また、端女に言いつけて、槓を



渡り廊下の欄干にしぼりなおさせた。両足をまたがせての、即席の木馬責めだ。

もちろん無防備の下半身は、じかに欄干に密着して、そこから、痛みがのぼり、全身を駆けめぐった。

△3▽

「これほどにしても、どうしても口を割ろうとしないのかえ、この強情ものめッ！」

岩藤は、目をつりあげ、肩でハアハア息を

しながら、言った。

「こやつを、ハダカにむいておしまいッ」

ヒステリックな声が、端女に命じた。

二、三人の端女が、駆けよって、槇の衣類をはぎ、柱にしぼりつけた。

槇は、同性の前とはいえ、裸身をさらす羞恥に身をちぢめた。それがかえって、端女たちの残忍な血をあおった。

「長虫をもってきや」

岩藤の声に、だが、さすが冷血の端女たちも、一瞬、ハッとした。ひとりが、ヘビをとりて走った。

ヘビは、岩藤が飼っていたものだった。ヘビとたわむれるとき岩藤は、女の執念をまる出しにして喜ぶ習性をもっていた。しかし、おおかたの女中たちは、気味悪がっていたのだが、老女のすることとて、口をつぐんでいたのだ。

箱のフタをあけると、六尺ぐらいもあるヘビが、ニョロリと鎌首をもたげた。

取り囲んでいた女中たちも、サッとあとず

さった。だが、柱にくぐられた槇は、身動きもできず、顔面いっぱい恐怖をみなぎらせて、身をふるわせた。

「さあ、男の名を、おい」

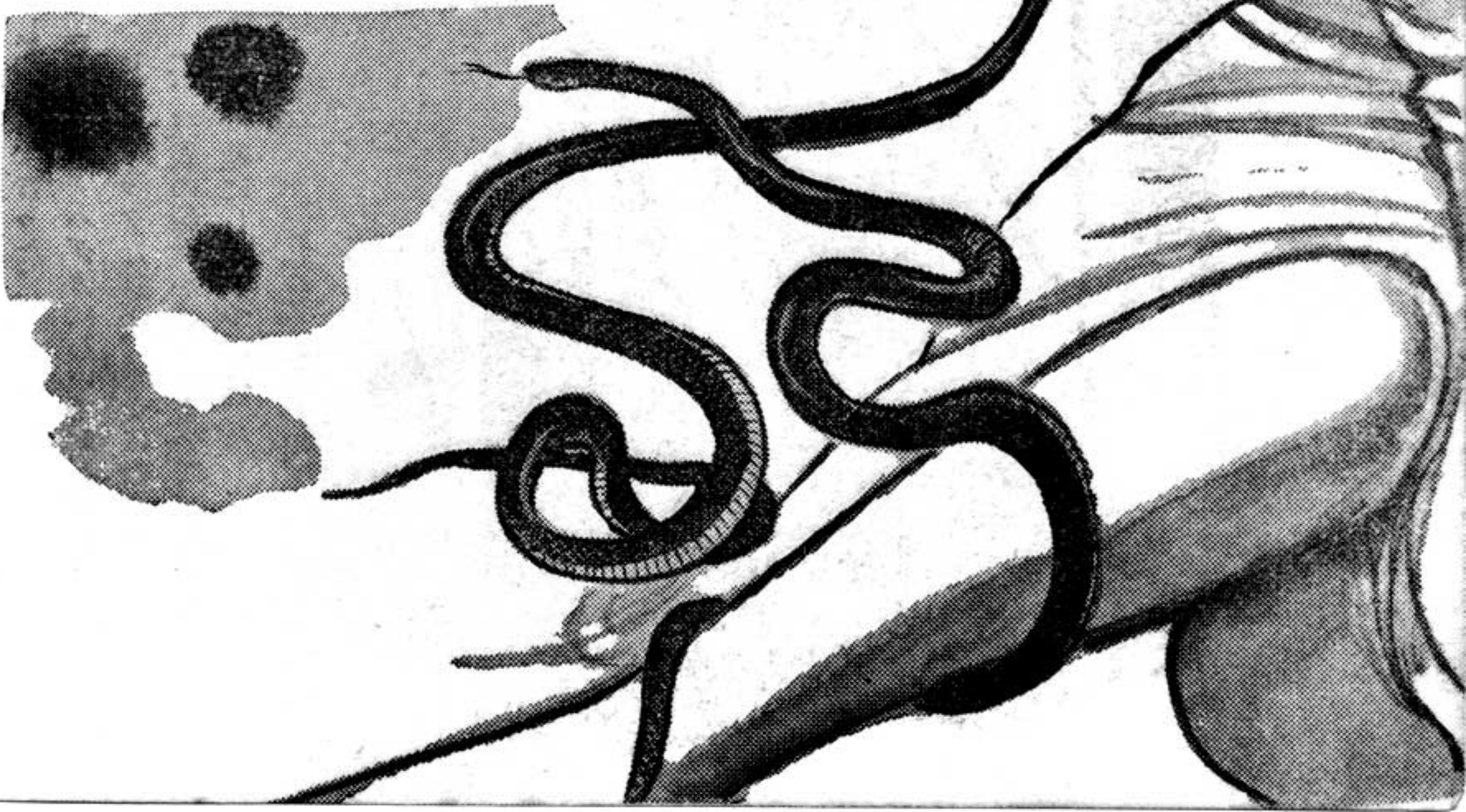
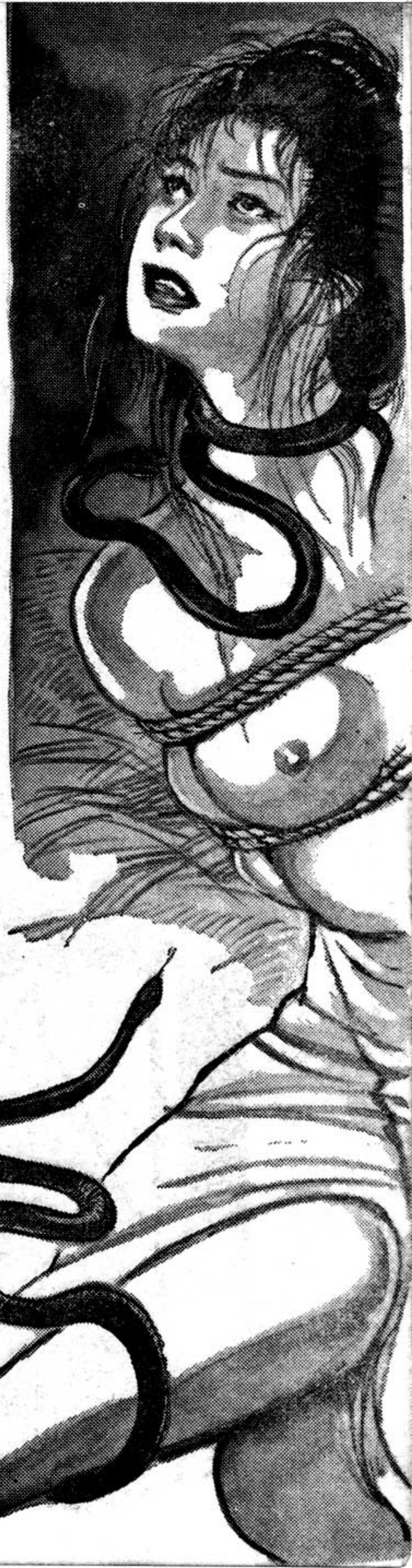
岩藤がいった。槇は恐怖に、声も出なかった。

△4▽

「しぶとい女だねえ、槇は……」

こういって岩藤が命じたのは、ハダカの槇をさかさに吊るすことであった。

からだのすみからすみまで、衆目にさらした羞恥が、よけいに槇の心をさいなみ、頭にドッ、ドッと音たてて血の下がるのを感じ、これまで責められたのだから、死んでも、あの人の名はいうまいと、槇は覚悟を決めた。



だが、心のなかでは、

(主税さま、どうぞ、お許しください。お腹のややこしいしよに死ぬことを。ややこは槇だけのものではありません。主税さまの血の流れているものです。それを、それを……お許しくださいませ)

と、一心に、つぶやいていた。自分がしゃべることによって、恋人の身に危害の及ぶのを憂えるわが身を、槇は、いーと思いつつ、責め苦に耐えた。

ピシリッ！

ムチの音がしたが、もう肉体的な苦痛も感じず、そのまま深い地の底へでも引き込まれるように、槇は、すーっと魂が抜けていくように感じた。

△5▽

槇が、ふと、肌をさす冷たさに気がついたとき、半身を水にひたしている自分を発見した。水槽の中に横に渡された丸太に、馬乗りの形で、膝をちぢめてしばらくいたのだ。

うす明かりが窓からさし込んでいたから、夜明けに近いのかもしれない。何時間、気を失っていたのかわからないので、時間の観念はなかった。

やがて表に足音

がして、岩藤が数人の女どもを連れてはいってきた。

「おや、気がついたようだえ」

つづいて、

「槇、いい加減に申し上げたらどうじゃえ」

という声が聞こえた。だが、槇は口を開こうとしなかった。

「お回し。どこまでも強情なのだから……」

という岩藤の声につれて、槇を縛りつけた丸太が、きしみをたててグルリと回転した。水責めなのだ、と思った瞬間、槇は、また気を失った。



読者の広場



■海老責めへの注文

画報十二月号の海老責め写真は傑作。今まで随分いろいろ写真も見たが、これほど心の底まで揺さぶられた写真は見たことも接したこともない傑作だ。

女優の水戸光子そっくりのモデルの顔も好ましく、肢体もいい。御誌ならではのアイディアだ。小生、この数枚の写真で完全に御誌のトリコになった。もっとも、この写真に欠点がないわけではない。まず縄が多過ぎる。足だけに十三本もかかって脛や足の甲までからけてある上にたるとなる。この種のもものは簡素に所要所だけキツチリ結んだほうが効果的ではないか。

次に、あお向けばかりでなくうつ向けが絶対欲しかった。それから同じ写真が二枚あるのはどうしたとか。一枚は色刷りにしても、重複は不可。なお一番最後のはピントが甘い。最後に、六態の二枚目以下の五枚はもっと画面一杯に出して周囲の空間をなくしたほうが迫力がでて効果的。

小生の注文を述べると、縄では食い込んで痛からうから、少

し太めの紐にする。細目の帯か腰紐などどうか。この紐を四、五回、両足首にキツチリ回して十センチぐらいの幅広にする（この動作から撮影開始）。幅が狭いと、次に紐を引きしぼるとき足首に食い込んで、痛からうから。

それから、女の上体を力まかせに押え付ける。これは、縛者の手か足で肩を押え付ける（撮影）。そして素早く、足首からの二本の紐を肩に回して（首の両脇に添って）うしろ手首を縛ってある紐に通し、力いっぱい引き絞る。これで女の身体が海老のように湾曲する。この時女は息がつまって思わず悲鳴に近いうめきを発するだろう（女の表情撮影。あるいはこのとき顔は下向きで困難か）。

これで出来上がりであるが（撮影）、この身動きの出来ない身体を今度は仰向けに転がして見る。この天井向きの姿が一番いいのではないか（各種撮影）。そして、もし先ほど紐を引き絞ったとき表情がうまく撮れなかったら、仰向けにしてちょっと置き、苦しみの表情が出たら素

早く撮影してしまおう。

御誌では「古書によると両足とアゴがくっつくまでくっつて」とあるが、これはもちろん本物の拷問の場合だから、モデルに対してそこまでは出来ないにしても、なるべくそれに近くやって見る。今度の写真のように縄がたるんでいるのではお話にならない。

とにかく、十二月号のこれで調子はわかったから、この次はあらかじめシャッター・チャンスを十分に研究しておいて手早くやることにすれば、上体を前に押え付けてから撮影終了までには（苦しい時間）十分か十五分もあればいいのではないか。モデルには読者と芸術のため再びご辛抱願いたい。

何しろ、この構図は、絶対他に見られない素晴らしいアイディアなので、ぜひこの一回に終わらせないで、もっと掘り下げて発展させていたきたい。いろいろと縛って見るのももちろんよいが、この種の特種なテーマを掘り下げて見るのが、より深く、より広く、より多くの読者をとらえるゆえんである

(現に私もその読者になった一人)。

その意味で、処刑の図(うしろ手にくぐられムシロの上に引き据えられて、まさに打ち首にされようとしているところとか、絞首台に乘せられたところとか、その他いろいろ)や審問の図(白洲で裁きを受けているところ)とか、牢屋の中で呻吟している図とか(必ずしも鉄格子などなくても表現出来よう)、同じ縛られているのでも、ただなんとなく縛られているという図だけでなく、何かこのような力強いテーマの下に、囚われの女、処刑の女の悲しみ、哀れさ美しさを的確に出すようにしたら、どうか。ご一考をわずらわしたい。

海老責め写真に感激のあまり一筆書きました。(水戸光雄)

■禪姿に感激

先日申し込みました分譲写真「禪姿二人プレイ」さっそく送りくださいましてありがとうございます。毎日あかずに眺めております。あの被縛方のモデル氏は大変気に入りました。出来ましたらモデル氏の職業・年齢などお知らせください。僕もいろんなものを集めております。

男女性交写真などは数百枚集めました。僕が一番ほしい男性禪緊縛写真は少なく、奇くから買ったのが少しあるのと、そのほか四十枚ほどあります。まだまだいくらかでもほしく、どうぞ、いろいろなポーズの責め写真を分譲してください。お願い申し上げます。

なお僕は、強烈なる六尺禪の愛用者で、男性責め写真でも、全裸か六尺以外の写真はほしくありません。僕は高校時代から六尺禪を緊め始め、数年になります。家人の公認になっております。禪だけは人に洗われるのがいやで、自分で洗います。また、たくさん禪を集め、今では自分の作った木箱に一ぱいになりました。一番好きなのは真っ白のサラシの禪です。あの写真の被縛モデル氏の禪がほしく、出来ましたら分譲してください。お願いいたします。

僕が風奇を初めて知ったのは十月号で、本屋にて何げなしにペラペラめくっているうち、禪をした男の写真が目に入り、とたんに風奇という本が僕にとって愛人以上になってしまいました。芦立鋭吉氏のすばらしい小説、十一月号の憲兵狩り、十二月号の立石さま縁起、自室にてカギをかけ幾度も読み返しております。

それに、またまた驚いたことは、画報風奇十一月号です。女性ものばかりと目もくれていなかったのですが、ついめくっているうちに、禪姿二人プレイの五ページにわたる男性責め写真、夢にまで見たことが目前に現われ、この喜びと驚きは何とも言えません。買ったのは十月二十九日で、一冊きり残っていました。

それから毎日、本屋に足を運びましたが、やっと十一月二日、風奇十二月号が手に入りました。画報風奇十二月号を追って、一日おきに町に出、五、六軒の本屋を回りますが、いまだに姿が見えません。風奇の発売日と画報風奇の発売日をお知らせください。(徳島・山田明)

■残酷部隊

昭和二十年五月、当時私はフ

イリピンに駐屯していた。戦局は日増しに悪化して、開戦当初のはなやかさは完全に失われていた。フィリピン軍のゲリラが各所に出没して、夜間など一人歩きは絶対にできない状態であった。

私の属していた部隊は、正規のものではなかった。いわば各地の敗残兵をかり集めた一つの集団にすぎなかった。その中で指揮をとっていたのが山西中尉だった。彼は一見したところやせぎすで、のっぺりした役者風の男であった。その山西中尉があのように冷酷凄惨な男だとは気がつかなかった。また中尉がその所業にふさわしい最期をとげたのも、今にして思えば当然のような気がするのである。

朝から鉛色にくもった空が、なにか私の運命を暗示するかのような気持ちを抱いて、私は五人の部下とともにゲリラの所在をつきとめるべく、重くたちふさがったジャングルへ斥候に出たのだった。

予定の行動を終わって帰路につこうとしていた時、人の足音を聞きつけたので、急いで身を

伏せた。近づく足音のほうへ目を向けると、白い衣服がチラチラ見えた。フィリピン人らしかった。

その時、兵の一人が「軍曹殿誰かいるようであります」というので、見ると担架をかついだ二人の土民が、ジャングルへ逃げこもうとしていた。声をかけたが止まらないので、威嚇射撃をするとやっとたち止まった。担架の上には、腹のふくれた女が寝ていた。女は肩でゼイゼイ息をしている。出産まじかのようだった。

隊へ帰りついた時は、くたくたであった。中尉は非常に喜んで酒をふるまってくれた。たかがゲリラのはしくれ二人と女一人をとらえたぐらいでそんなに喜ぶのがおかしかった。その時はただそう思っただけで、つかれのために、そのままねむりこんでしまった。

次の朝、私は、中尉によべれた。

「あいつらはなまぬるい手段では白状しないから、これから俺がとっておきの方法で口を割らせるから、二人を広場へ出して

おけ」

と口もとにひきつった笑いをうかべていった。

二人のゲリラ兵は拷問をかくごしているらしく、少しも恐れたようすがなかった。兵たちは、これからおこるなにごとかを見ようと集まってきた。

中尉がやってきた。二人のゲリラは、日本語がわかるらしかった。

「すなおにお前たちの本拠をしゃべったらどうだ、いたいめにあわんうちにいったらどうだ」

二人は、中尉の軍服につばをはきつけた。だが中尉はニヤニヤ笑っているだけであった。二人はもがいたが、がんじがらめにしぼられているのでは、どうにもならなかった。

「あとで、白状するといってもうけつけないぞ、貴様たちがその気なら、これからいい物を見せてやる」

男たちの視線は、中尉の顔に憎悪をもってそそがれていた。

「おい、だれか、あの女をつれてこい」

二人の兵がかけて行った。女が担架で運ばれてきた。一方の

男がさかんになにごとかいっている。たぶんその女は妻なのである。男たちはなにもかもしゃべるから、女に手出しをしないでくれといった。

「あいつらのいうことは、どうせでたらめめにきまってる」といって、中尉は耳をかさなかつた。

「女を木にしばりつけろ」

「それは無理です」

実際、それはできなかった。女は陣痛のために油汗を流していた。

「男の前へ女をねかせろ」

中尉の顔からは笑いが消え、そのかわり目だけが物につかれたように光っていた。女はヒイヒイと笛のような声をあげていた。中尉は拳銃をにぎりしめながら、

「皆、よく聞け、こいつらはゲリラだ。われわれを物陰からこっそりねらい射ちする卑怯なやつらだ。お前たちの戦友が、こいつらのためへル・マゾだったのだ。だから、死んでいった」



つらをさばくから、よく見ろ」もはや中尉の顔は常人ではなかつた。

「中尉殿、女に危害を加えるのだけはやめてください」

と私はたのんだがきくわけはなかつた。中尉はいきなり女の衣服をはぎとった。女の悲鳴がいちだんと高く、あたりをふるわした。兵たちの目が、いちよへそそがれた。長い間女から遠ざかっていた者にとっては、こんな醜態も興味をひくものかもしれない。銃口が女の腹部へ向けられた。その腹は、青白くふくれて、ハ虫類ように思えた。二人の男は舌をかみきっていた。口からあふれた血が、白い衣にすいこまれていく。しかし中尉は拳銃をさげなかつた。兵たちはかたずをのんでそれを見ていた。にぶい発射音が耳

カプリス・イン・メキシコ

ここに紹介するのは、メキシコ某社の秘蔵品の目録の一部で、製品の使用方法を説明した最新の輸入資料です。こういうものが、わが国だけでなく、諸外国でも、盛んに売買されていることを実証し、紹介するためのものです。このほかに製品写真も一〇〇点以上ありますが、印刷が不鮮明なので割愛します。

私の知識として、アメリカや西独にも、同様のメーカーがありますが、こうした諸器具類のメーカーとして、このように広汎な分野にわたっているところはありません。

この絵に示されているのは、単に靴、ハイヒール、コルセットだけでなく、各種の鞭、帽子、衣装、拘束具、貞操帯などを含んでおり、それらは、直ちに実用に供することができます。はなはだしく高価なものですから、

一般におすすめるわけにもいきませんが、世の中には、こうした会社もあるということをお知らせするために、あえて、そのほとんど全部を掲載しました。



















